

令和5年度 ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

試掘調査

- 市毛遺跡 (第10次)
- 市毛下坪遺跡 (第23～25次)
- 大房地遺跡 (第21次)
- 大和田遺跡 (第6次)
- 三反田蛭塚遺跡 (第8次)
- 金上向山遺跡 (第4次)
- 三反田古墳群 (第7次)
- 高野富士山遺跡 (第20・21次)
- 東中根清水遺跡 (第7次)
- 田彦古墳群 (第2次)
- 市ノ山遺跡 (第1次)
- 柳沢十二所遺跡 (第2次)
- 北根A遺跡 (第1次)
- 平磯宮上遺跡 (第2次)
- ニッ森古墳群 (第2・3次)
- 柴田遺跡 (第10次)
- 下高井遺跡 (第8次)
- 蛭塚西貝塚 (第2次)
- 原の寺遺跡 (第2次)
- 地藏根遺跡 (第9次)
- 筑波台遺跡 (第5次)
- 金上塙遺跡 (第12次)・金上古墳群 (第1次)
- 磯合古墳群 (第9・10次)
- 勝倉若宮遺跡 (第7次)
- 塙坪遺跡 (第1次)

2024



金上埜遺跡第 12 次・金上古墳群第 1 次調査区出土尖頭器

序 文

ひたちなか市は関東平野の北端部にあたり、茨城県の中央部からやや北東に位置し、那珂川河口部左岸の人口約16万人の街で、県都水戸市に隣接しています。標高30m前後の起伏の少ない平坦な台地で、台地を浸蝕して那珂川やその支流の中丸川等の小河川が流れています。これらの河川の流域や台地上には、肥沃な田畑や宅地などが広がっています。

当市の東側は太平洋に面して約13kmの海岸線が続き、那珂川などの河川流域の台地上は、原始・古代から人々の生活の場として栄え、三百数十箇所の集落跡・古墳・城館跡などの遺跡が確認されています。

なかでも古墳時代の埴輪づくりの工場とされる馬渡埴輪製作遺跡、装飾壁画で知られる虎塚古墳はいずれも国の史跡指定を受け、市を代表する遺跡として多くの市民に知られております。

このように、ひたちなか市は全国に誇れる文化遺産に恵まれる一方、毎年住宅等の開発行為が活発に行われており、やむを得ぬ理由で失われていく遺跡の記録保存を図るため、事前に確認調査等を実施しております。

今年度も、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に委託し、市内の埋蔵文化財包蔵地内において調査を実施いたしました。本書はこれらの確認調査等の記録をまとめたものであり、それぞれの調査は小規模なものではありますが、毎年の調査の積み重ねにより、多くの成果を得ることができました。

最後になりますが、快く調査のご承諾をいただきました地権者様や、調査に参加されました皆様に感謝申し上げますとともに、調査や本書の作成にご指導、ご協力を頂きました関係各位の皆様にご心から感謝申し上げます。

令和6年3月

ひたちなか市教育委員会
教育長 野 沢 恵 子

例 言

- 1 本書は、令和5年度国費補助事業として、ひたちなか市教育委員会の委託を受けて、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施したひたちなか市内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、令和5年1月から12月にかけて実施された発掘調査についての報告であり、市毛遺跡、市毛下坪遺跡、大房地遺跡、大和田遺跡、三反田蛸塚遺跡、金上向山遺跡、三反田古墳群、高野富士山遺跡、東中根清水遺跡、田彦古墳群、市ノ山遺跡、柳沢十二所遺跡、北根A遺跡、平磯宮上遺跡、ニッ森古墳群、柴田遺跡、下高井遺跡、蛸塚西貝塚、原の寺遺跡、地蔵根遺跡、筑波台遺跡、金上埜遺跡、金上古墳群、磯合古墳群、勝倉若宮遺跡、埜坪遺跡の計26遺跡について、30件の試掘・確認調査を実施し、大房地遺跡、下高井遺跡の計2遺跡について、2件の本調査を実施した。調査期間等は2～3頁一覧表のとおりである。なお、試掘調査は主な遺跡のみ報告し、大房地遺跡・下高井遺跡の本調査報告は、来年度の報告書に掲載予定である。
- 3 発掘調査および整理報告は、ひたちなか市教育委員会総務課文化財室の指導のもとに、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文化財調査事務所が実施したものであり、組織は次のとおりである。

理 事 長	渡邊 政美		
副 理 事 長	須藤 雅由		
常 務 理 事	高田 晃一		
理 事	雨澤 正	榑田 眞	綱川 正 大和田 健 米川 央洋 湯浅 博人 白土 光伸
監 事	北原 裕二 安 智範		
文 化 課 文 化 財 調 査 事 務 所	課 長	大川 英樹	
	所 長	佐々木 義則	
	課 長 補 佐	稲田 健一	
	主 事	田中 美零	
	嘱 託	齋藤和佳子 西野 陽子	

- 4 発掘調査の従事者は次の通りである。
調査員：田中美零、佐々木義則
調査補助員：青木千歌子、荻優樹、小貫栄子、海後晴美、鈴木篤、寺門信幸、中嶋順子、堀口智恵美、矢野徳也、渡辺徹
- 5 整理作業及び本書の作成に従事したものは、次の通りである。
青木千歌子、稲田健一、小貫栄子、桐嶋美子、齋藤和佳子、佐々木義則、佐藤富美江、鈴鹿八重子、田中美零、西野陽子、矢野徳也
- 6 本書は佐々木義則が編集した。
- 7 本書の執筆と分担は以下のとおりである。
田中美零(弥生時代以前の遺物, 第三章), 稲田健一(古墳時代の遺物, ニッ森1・2号墳測量図, 第四章), 矢野徳也(岩石同定), 佐々木義則(左記以外)
- 8 弥生時代以前の資料は常陸大宮市教育委員会の鈴木素行氏にご指導いただいた。
- 9 遺構の略号の意味は次の通りである。 SK：土坑，P：ピット，SD：溝跡，K：攪乱，T：トレンチ
- 10 発掘調査の出土資料は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターで一括保管している。
- 11 本書の作成にあたっては、次の方々に御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(50音順・敬称略)
朝日あかり 朝日翔磨 朝日貴広 池田晃一 茨城県教育庁文化課 岩間友也 梅田由子 大内平次 大谷盛寿 大谷高陸 大谷真弥 大和田修
オフィスエイト株式会社 梶ヶ山眞理 鹿志村力雄 加藤千里 金澤孝智 (株)AQ Group (株)エムズ・エステート 株式会社アーネストワン
株式会社アイエステートプランニング 株式会社川友 株式会社城東フルーツ 株式会社ゼック 株式会社ノザワワールド (株)東海住宅エンジ
イホーム 川上友仁 川崎悠一 川又幸江 木村桂一郎 黒澤栄子 栗原悠 後藤商事株式会社 坂上和弘 柴田泰典 住谷和浩 セイウン開発株
会社 照沼三夫 埜くり子 埜貞 原田武保 平澤聡 平沢茂昭 平野浩一 深田健一 皆川恭之 三井猛 宮内丈史 武藤邦子 武藤佑季 村上愛
莉 村上翔太 安孝雄 安孝宗 安佑太 山田達也 山田麻友子 有限会社アシスト 有限会社カシマ不動産 有限会社三井考測 横信建材工業(株)
横須賀明
- 12 事務局は、ひたちなか市教育委員会総務課文化財室内に置き、組織は次のとおりである。

総 務 課 文 化 財 室	課 長	佐藤 浩之
	文 化 財 室 長	鈴木 正幸
	主 査	栗田 昌幸
	主 事	斉藤 新

目次

I	概要	1	17	勝倉若宮遺跡	19
				(1) 第7次調査報告	19
			18	埜坪遺跡	20
				(1) 第1次調査報告	20
II	試掘調査報告	4	III	2022年調査の出土遺物	21
1	市毛遺跡	4	1	柴田遺跡第6次調査出土遺物	21
	(1) 第10次調査報告	4		(1) 縄文時代の遺物	21
2	市毛下坪遺跡	4			
	(1) 第23次調査報告	4			
	(2) 第24次調査報告	5			
	(3) 第25次調査報告	6	IV	海岸部の石棺墓の調査	25
3	大房地遺跡	6			
	(1) 第21次調査報告	6			
4	三反田蜆塚遺跡	7			
	(1) 第8次調査報告	7			
5	金上向山遺跡	8			
	(1) 第4次調査報告	8			
6	三反田古墳群	10			
	(1) 第7次調査報告	10			
7	高野富士山遺跡	11			
	(1) 第20次調査報告	11			
8	田彦古墳群	11			
	(1) 第2次調査報告	11			
9	柳沢十二所遺跡	12			
	(1) 第2次調査報告	12			
10	平磯宮上遺跡	13			
	(1) 第2次調査報告	13			
11	ニッ森古墳群	13			
	(1) 第2次調査報告	13			
12	下高井遺跡	15			
	(1) 第8次調査報告	15			
13	蜆塚西貝塚	15			
	(1) 第2次調査報告	15			
14	筑波台遺跡	16			
	(1) 第5次調査報告	16			
15	金上埜遺跡・金上古墳群	16			
	(1) 金上埜遺跡第12次・金上古墳群第1次調査報告	16			
16	磯合古墳群	17			
	(1) 第9次調査報告	17			
	(2) 第10次調査報告	18			

I 概要

ひたちなか市は、茨城県の中央部に位置し、面積100.23 km²、人口約16万人を擁する地方中心都市である。市域南側を東流する那珂川は栃木県那須岳に源を発し、茨城県のほぼ中央部を東西に横断し太平洋へと注ぐ全長150kmの河川であり、古くから流域の文化形成に大きな役割を果たしてきた。本市は、この那珂川河口左岸域に位置する。市域是那珂川の支流である中丸川・大川・本郷川により開析され、小支谷が発達する。市域の北側を東流する新川付近の低地は、近世まで真崎浦という入り江であったが、現在は広く水田化され、東海村との境となっている。

現在市内には、約300か所以上の遺跡が所在する。市域では昭和30年ごろから都市化が進み、周知遺跡内

における個人住宅建設件数も増加の一途をたどり、そうした事態に対応すべく、昭和54(1979)年から、国・県の補助を受け、市教育委員会を主体とした市内遺跡発掘調査事業を継続して実施してきた。市内遺跡発掘調査は市内各地で実施されてきたこともあり、市域の埋蔵文化財の全体的状況を知る上で、その調査の成果は貴重な資料となっている。

平成20年度から、市内遺跡発掘調査は市教育委員会から財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社(現公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社)に委託されるようになり、公社が主体となり実施されるようになった。

令和5年は、26カ所の遺跡において試掘調査30件、2カ所の遺跡において本調査2件が実施され、大房地遺跡における縄文時代住居跡や、下高井遺跡における古墳時代から奈良・平安時代住居跡などの成果を得ている。



第1図 調査遺跡の位置

第1表 令和5年市内遺跡発掘調査一覧

No.	遺跡名	調査 回数	所在地	調査期間	調査原因	調査 種別	調査担当	対象 面積	調査 面積	遺構	遺物
1	いちげいせき 市毛遺跡	10次	市毛字上坪 1110 番 15 ほか	1月31日～ 2月7日	宅地造成	試掘	田中 佐々木	808 m ²	137 m ²	住居跡 12 基 (古墳～平安), 土坑 10 基, ビット 23 基	土師器, 須恵器, 石製模造品, 近世陶器
2	いちげしもつげいせき 市毛下坪遺跡	23次	市毛字下坪 420 番 1	2月14～21日	集合住宅	試掘	田中 佐々木	920 m ²	114 m ²	住居跡 5 基 (奈良・平安), 溝跡 1 条, 土坑 6 基, ビット 2 基	土師器, 須恵器, 近世陶器
3	いちげしもつげいせき 市毛下坪遺跡	24次	市毛字下坪 424 番 1	2月14～21日	集合住宅	試掘	田中 佐々木	850 m ²	115 m ²	住居跡 4 基 (奈良・平安), 溝跡 2 条, 土坑 2 基, ビット 3 基	土師器, 須恵器, 礫
4	おおぼうちいせき 大房地遺跡	21次	勝倉字大房地 2659 番 4	2月28日～ 3月3日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	542 m ²	56 m ²	住居跡 2 基 (縄文), 溝跡 2 条, 土坑 5 基(縄文), ビット 4 基	縄文土器, 須恵器, 砲弾破片
5	おおわだいせき 大和田遺跡	6次	中根字大和田 4541 番 4	3月7～11日	宅地分譲	試掘	佐々木	991 m ²	136 m ²	なし	なし
6	みたんだしげいせき 三反田蛭塚遺跡	8次	三反田字蛭塚 4369 番 1	3月14日～16日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	327 m ²	23 m ²	土坑 3 基 (縄文), ビット 2 基	縄文土器
7	かねあげむかいやまいせき 金上向山遺跡	4次	金上字向山 607 番 1 ほか	4月18～25日, 7月20日～ 8月17日	宅地造成	試掘	田中 佐々木	9,653 m ²	614 m ²	住居跡 19 基 (奈良・平安), 溝跡 8 条, 土坑 5 基, ビット 8 基	縄文土器, 土師器, 須恵器, 陶器
8	みたんだこふんぐん 三反田古墳群	7次	三反田字天王前 4548 番 3 ほか	5月9～17日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	492 m ²	50 m ²	溝跡 1 条	須恵器
9	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	20次	高野 1695 番 10	5月9～11日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	306 m ²	32 m ²	住居跡 1 基 (古墳 1), 溝跡 1 条	土師器, 鉄滓
10	ひがしなかねしみづいせき 東中根清水遺跡	7次	中根字中内 6200 番 1	5月24～26日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	397 m ²	34 m ²	ビット 1 基	弥生土器, 土師器, 須恵器, 近世土器, 近世陶器
11	おおぼうちいせき 大房地遺跡	22次	勝倉字大房地 2659 番 4	6月20日～ 7月19日	個人住宅	本調査	田中 佐々木	60 m ²	75 m ²	住居跡 1 基 (縄文), 土坑 10 基 (縄文 7, 奈良 1, 近代 1, 時期不明 1)	縄文土器, 土師器, 須 恵器, 陶器, 石器, 埴輪, 砲弾
12	たびこふんぐん 田彦古墳群	2次	田彦字後原 1367 番 10 ほか	6月6日～27日	宅地造成	試掘	田中 佐々木	4,026 m ²	282 m ²	溝跡 2 条, 土坑 1 基, ビット 4 基	縄文土器, 土師器
13	いちのやまいせき 市ノ山遺跡	1次	長砂字市ノ山 1508 番 2	6月13日～28日	干し芋加工 施設	試掘	田中 佐々木	997 m ²	103 m ²	土坑 1 基	なし
14	やなぎざわじゅうにしょうせき 柳沢十二所遺跡	2次	柳沢 711 番 3	6月20～29日	個人住宅	試掘	佐々木	313 m ²	21 m ²	土坑 1 基 (縄文)	縄文土器
15	きたねえーいせき 北根 A 遺跡	1次	足崎字北根 1081 番 ほか	7月5日	重機置場 造成	試掘	佐々木	4,376 m ²	13 m ²	なし	なし
16	ひらいそみやうせき 平磯宮上遺跡	2次	平磯町 5256 番 1	7月11日～13日	個人住宅	試掘	佐々木	499 m ²	43 m ²	溝跡 2 条	なし
17	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	21次	高野 1695 番 10	7月19日～21日	個人住宅	試掘	佐々木	267 m ²	25 m ²	なし	なし
18	ふたつもりこふんぐん 二ツ森古墳群	2次	稲田字老ノ塚 221 番 1	8月1日～3日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	342 m ²	29 m ²	土坑 1 基	なし
19	ふたつもりこふんぐん 二ツ森古墳群	3次	稲田字老ノ塚 221 番 12	8月1～3日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	300 m ²	20 m ²	なし	なし
20	しばたいせき 柴田遺跡	10次	中根字柴田 5219 番 11	8月22～24日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	247 m ²	19 m ²	なし	なし

No.	遺跡名	調査 回数	所在地	調査期間	調査原因	調査 種別	調査担当	対象 面積	調査 面積	主な遺構	主な遺物
21	しもたかいせき 下高井遺跡	8次	三反田 5061 番 3	8月23日～26日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	495 m ²	47 m ²	住居跡 8 基 (古墳～平安), 土坑 4 基	土師器, 須恵器, 陶器
22	いづかにしかいづか 蛭塚西貝塚	2次	三反田宇天王前 5083 番 9	9月5～12日	個人住宅	試掘	田中 佐々木	310 m ²	19 m ²	溝跡 1 条, 土坑 1 基	縄文土器, 土師器
23	はらのてらいせき 原の寺遺跡	2次	足崎 1521 番 2	9月12～13日	太陽光発電 施設	試掘	田中 佐々木	7,593 m ²	42 m ²	なし	なし
24	じせうねいせき 地蔵根遺跡	9次	勝倉字地蔵根 2823 番 2	9月20日～22日	建売住宅	試掘	田中 佐々木	206 m ²	21 m ²	土坑 1 基, ビット 2 基	なし
25	つくばだいせき 筑波台遺跡	5次	市毛字上坪 1197 番 1	9月26日～29日	宅地分譲	試掘	田中 佐々木	1,341 m ²	199 m ²	住居跡 1 基 (時期不明), 土坑 6 基, 焼土遺構, ビット 2 基	弥生土器, 土師器, 中世土器, 陶器, 瓦, 焼石, 鉄製品
26	かねあげはなわいせき 金上埜遺跡 かねあげこふんぐん 金上古墳群	12次 1次	金上字埜 809 番ほ か	10月11日～ 11月1日	宅地造成	試掘	田中 佐々木	2,495 m ²	316 m ²	住居跡 15 基 (縄文 2, 平安 3, 時期不明 11), 溝跡 2 条, 土坑 10 基, ビット 20 基	尖頭器, 縄文土器, 土師器, 須恵器, 砥石
27	いそあいこふんぐん 磯合古墳群	9次	磯崎町字磯崎東ノ ー 4498 番ほか	10月17～24日	集合住宅	試掘	田中 佐々木	734 m ²	84 m ²	古墳 1 基, ビット 1 基	なし
28	かつくらわかみやいせき 勝倉若宮遺跡	7次	勝倉字地蔵根前 2694 番	10月24日～ 11月1日	宅地分譲	試掘	田中 佐々木	1,040 m ²	154 m ²	住居跡 7 基 (古墳 1, 平安 2, 時期不明 3), 溝跡 1 条, 土坑 1 基 (平安),	弥生土器, 土師器, 須恵器, 陶器
29	しもたかいせき 下高井遺跡	9次	三反田下高井 5061 番 3	11月21日～ 1月16日	個人住宅	本調査	田中 佐々木	90 m ²	175 m ²	住居跡 7 基 (古墳 2, 奈良・平安 5), ビット 3 基	縄文土器, 土師器, 須恵器, 陶器, 磁器, 鉄製品, 銅製品, 石製模造品, 瓦, カマド石材
30	いちげしもつほいせき 市毛下坪遺跡	25次	市毛字下坪 419 番 1	11月28日～ 12月14日	宅地分譲	試掘	田中 佐々木	2,953 m ²	352 m ²	住居跡 10 基 (奈良・平安時 代), 溝跡 1 条, ビット 1 基	土師器, 須恵器
31	いそあいこふんぐん 磯合古墳群	10次	磯崎町字磯崎東ノ 二 4585 番 21 ほ か	12月5～7日	個人住宅	試掘	佐々木	300 m ²	23 m ²	溝跡 1 条 (古墳周溝か)	なし
32	はなわつほいせき 塙坪遺跡	1次	西大島一丁目 11 番 21	12月13～20日	宅地造成	試掘	田中 佐々木	465 m ²	38 m ²	土坑 4 基, ビット 26 基	なし

II 試掘調査報告

1 市毛遺跡

(1) 第10次調査報告

調査地は、那珂川から北方に入り込む浅い谷の東側台地上に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は宅地であった。調査は4か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.3～1.0 mを測る。

調査の結果、住居跡12基、土坑10基、ピット23基が確認された。住居跡は時期を決定できる遺物がなく時期不明であるが、トレンチ出土遺物からみて古墳時代～平安時代にかけての住居跡と思われる。土坑及びピットからは遺物が出土しておらず時期不明である。調査区からは土師器、須恵器、石製模造品、近世陶器が出土した。

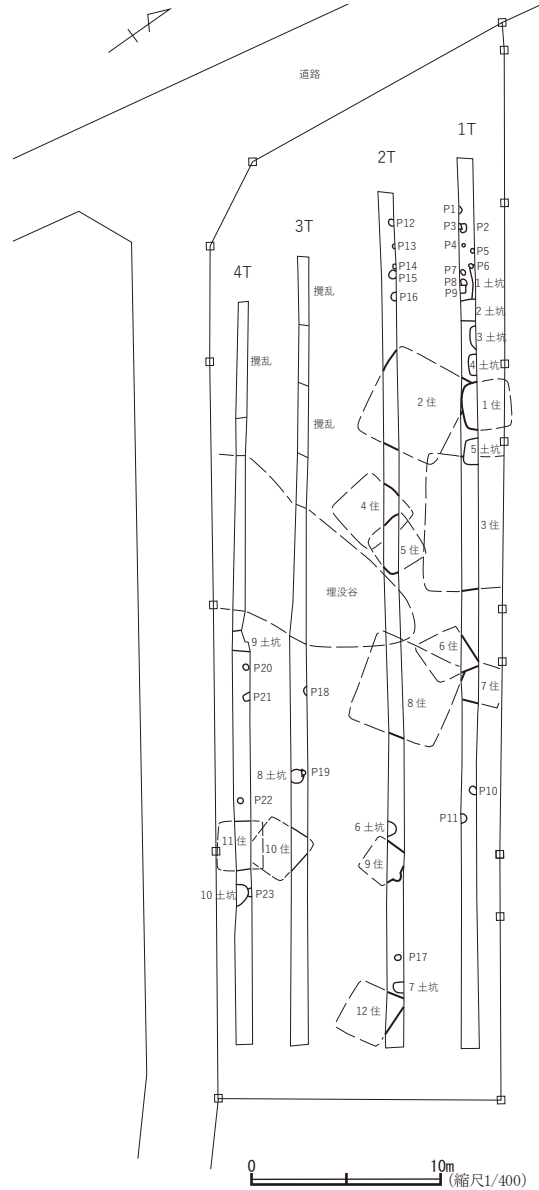
遺物説明

第4図

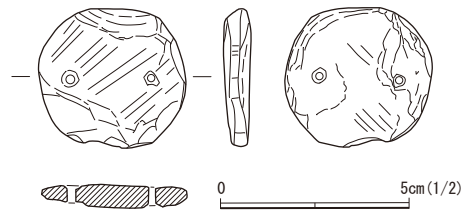
1 台帳：2トレ 材質：滑石 種類：双孔円板 法量：長3.8、幅3.6、厚0.5、孔径0.15～0.5、重量14.83 g 色調：青灰色



第2図 市毛遺跡の調査地点（数字は調査回数）



第3図 市毛遺跡第10次調査区



第4図 市毛遺跡第10次調査区出土遺物

2 市毛下坪遺跡

(1) 第23次調査報告

調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から100 mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は

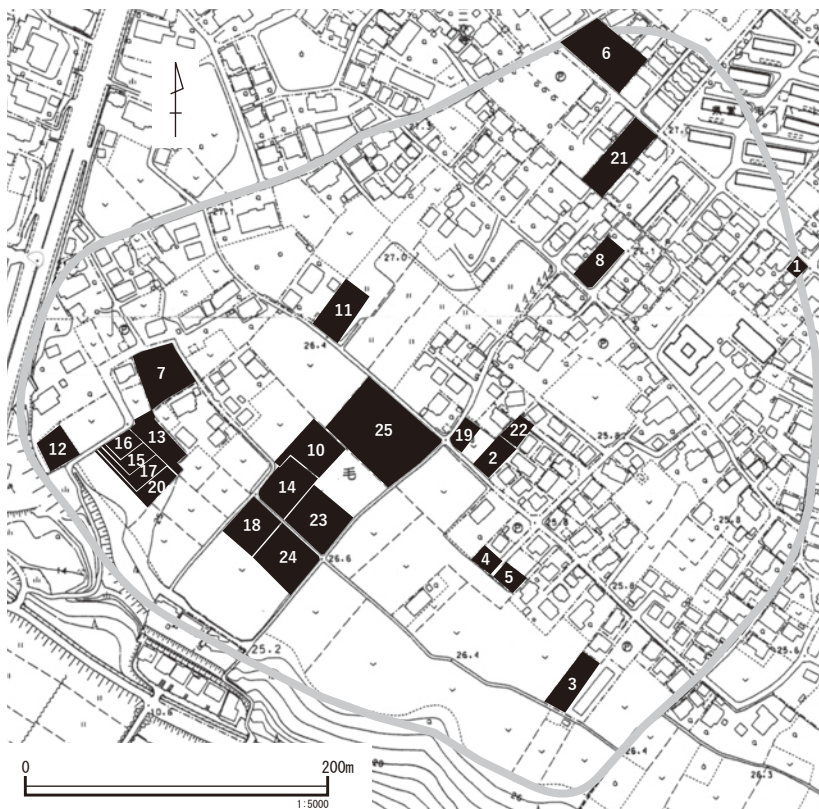
畑であった。調査は6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.6～0.9mを測る。

調査の結果、住居跡5基、溝跡1条、土坑6基、ピット2基が確認された。住居跡は出土遺物からみて奈良・平安時代の住居跡と思われる。溝跡・土坑・ピットは時期不明であるが、2号土坑はかわらけが出土しているのでは中世土坑の可能性がある。表土からは土師器、須恵器、近世陶器が出土している。

遺物説明

第7図

1 出土位置：3トレンチ2土坑 材質：土師器 器種：小皿 残存：30% 法量：口径(11.3)、器高2.7、底径(7.2) 色調：明褐色 胎土：砂粒なし、粉質 技法等：回転糸切り。底部内面ナデ。備考：17世紀頃のかかわりか？

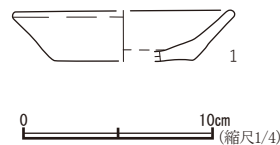


第5図 市毛下坪遺跡の調査地点（数字は調査回数）

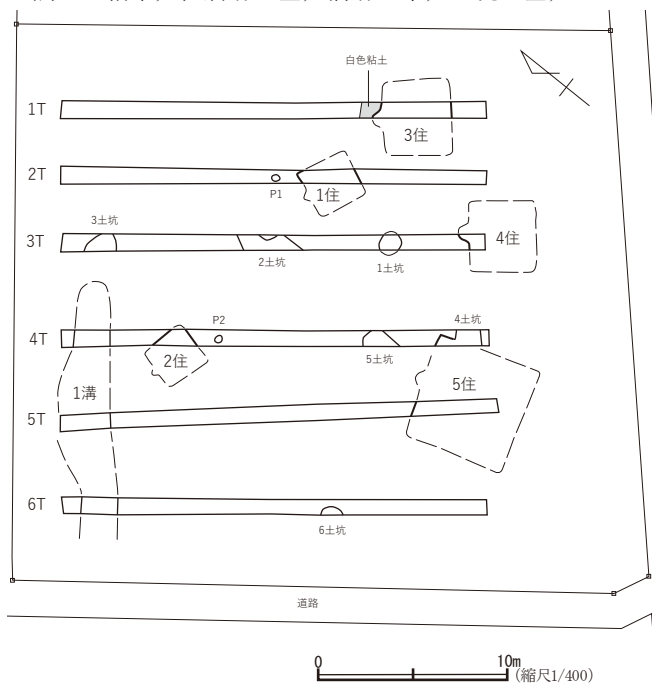
(2) 第24次調査報告

調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から60mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑であった。調査は6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.6mを測る。

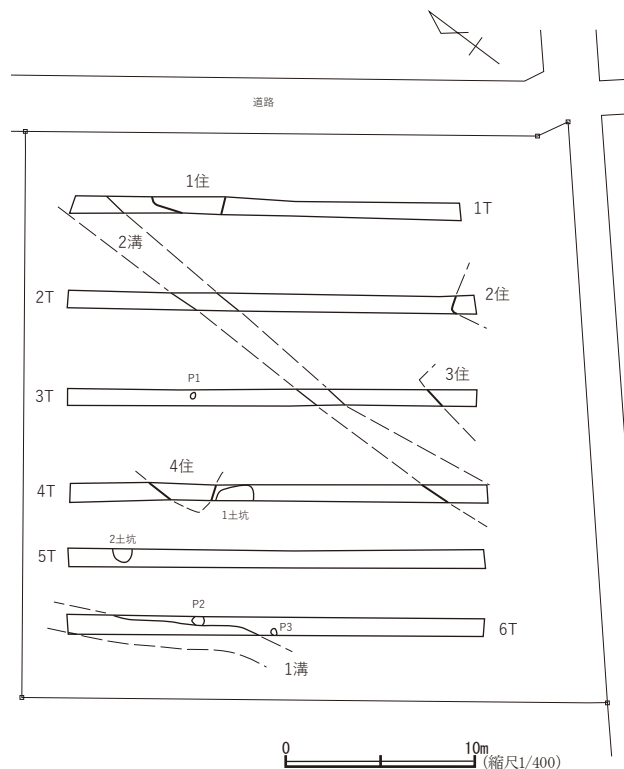
調査の結果、住居跡4基、溝跡2条、土坑2基、ピッ



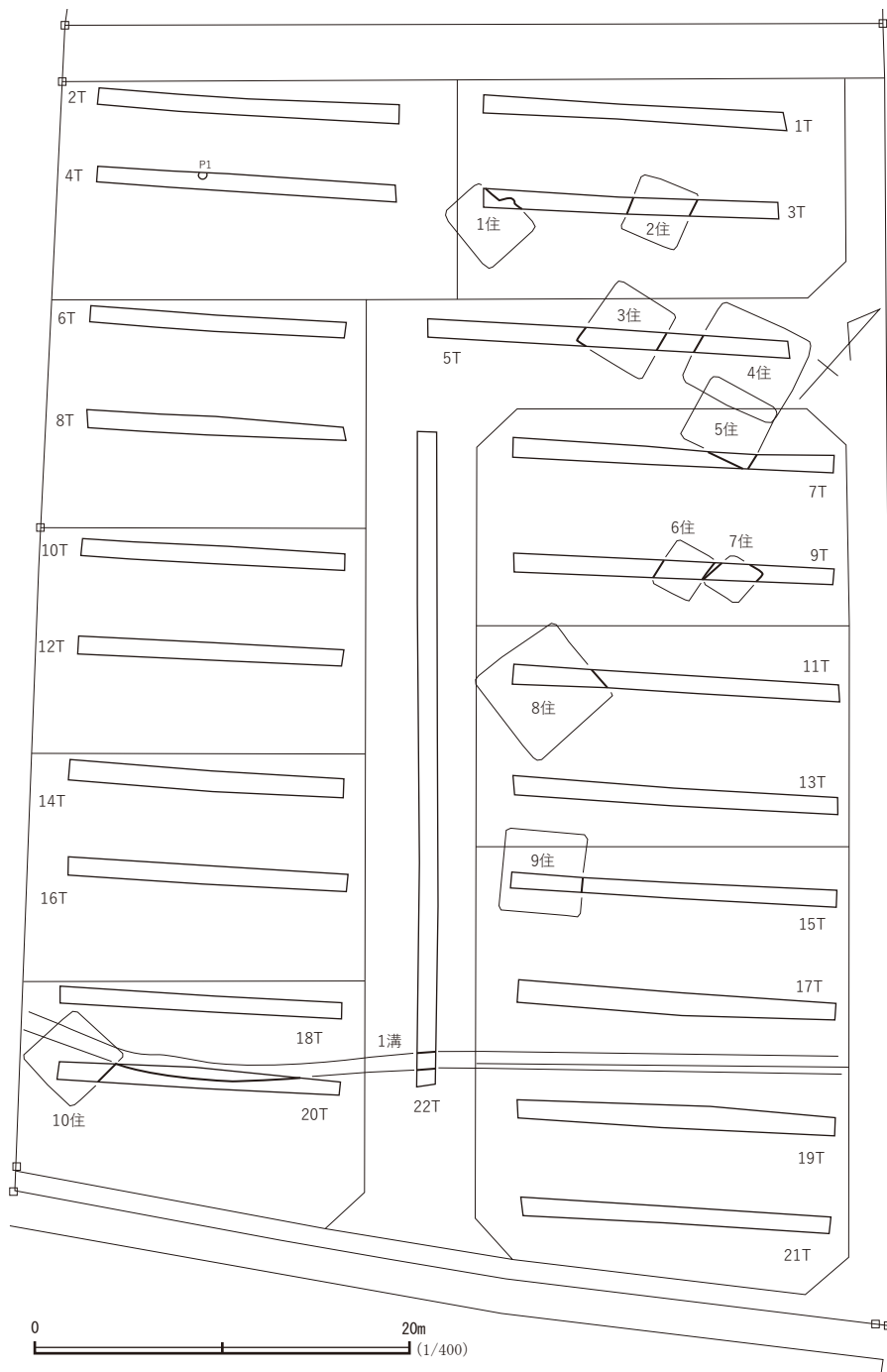
第7図 市毛下坪遺跡第23次調査区出土遺物



第6図 市毛下坪遺跡第23次調査区



第8図 市毛下坪遺跡第24次調査区



第9図 市毛下坪遺跡第25次調査区

ト3基が確認された。住居跡は出土遺物からみて奈良・平安時代と思われる。溝跡・土坑・ピットは時期不明である。表土からは土師器、須恵器が出土している。なおピット3付近の遺構確認面からこぶし大の焼けた礫がまとまって3つ出土した。

(3) 第25次調査報告

調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から170mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑であった。調査は22か所のトレンチを設定し、重機

による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.5～0.9mを測る。

調査の結果、住居跡10基、ピット1基、溝跡1条が確認された。調査区はゴボウ耕作のため縦横に激しく攪乱を受けていた。各トレンチからの出土遺物からみて、住居跡は奈良・平安時代と推測される。その他の遺構は時期を特定できる遺物がないため時期は不明である。調査区からは土師器・須恵器の小片が少量出土した。

3 大房地遺跡

(1) 第21次調査報告

調査地は、那珂川低地から北に入り込む支谷から110mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑であった。調査は8か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.5～1.0mを測る。

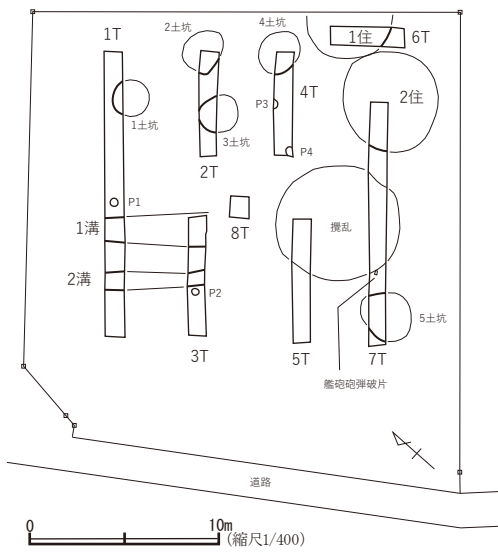
調査の結果、住居跡2基、溝跡2条、土坑5基、ピット4基が確認された。住居跡は出土遺物

からみて縄文時代と思われる。土坑は2・3・5号土坑は出土遺物から縄文時代と思われる。また1号土坑も色調が明るく硬い覆土からみて縄文時代の可能性が高い。4号土坑・溝跡・ピットは時期不明である。表土から縄文土器、須恵器が出土した。このほか、7トレンチの遺構確認面より艦砲弾破片が出土し、隣接する円形攪乱部が砲弾着弾点となる可能性も考えられる。

なお出土遺物は、令和6年度の報告書において、当調査区の本調査（第22次調査）出土資料とともに報告予定である。



第10図 大房地遺跡の調査地点（数字は調査回数）



第11図 大房地遺跡第21次調査区

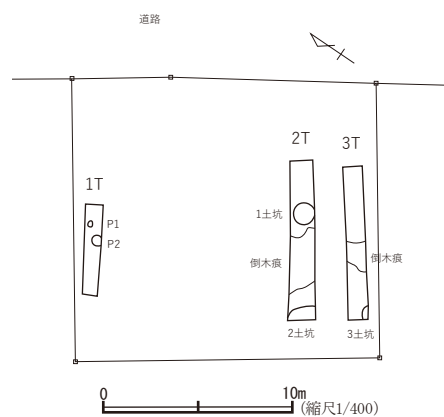
4 三反田蜆塚遺跡

(1) 第8次調査報告

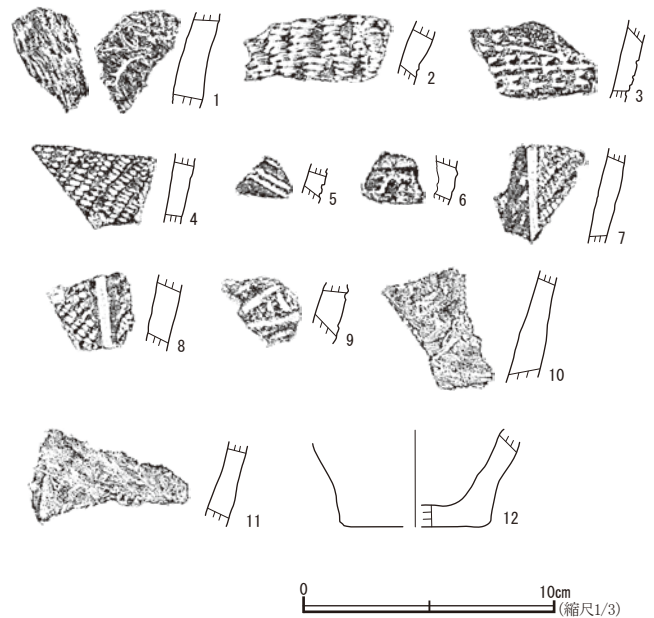
調査地は、中丸川低地に面する台地縁辺から120mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑であった。調査は3か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.2～0.3mを測る。調査の結果、土坑3基、ピット2基が確認された。土坑は出土遺物から1・3号土坑は縄文時代と思われる。また2号土坑も覆土からみて縄文時代の可



第12図 三反田蜆塚遺跡の調査地点（数字は調査回数）



第13図 三反田蜆塚遺跡第8次調査区



第14図 三反田蜆塚遺跡第8次調査区出土遺物

能性が高い。ピットは時期不明である。表土からは縄文土器が出土している。なお、遺構確認面がハードローム層となっていることから、過去において調査区周辺の地形は地表から1メートル前後削られているとみられる。

遺物説明

第14図

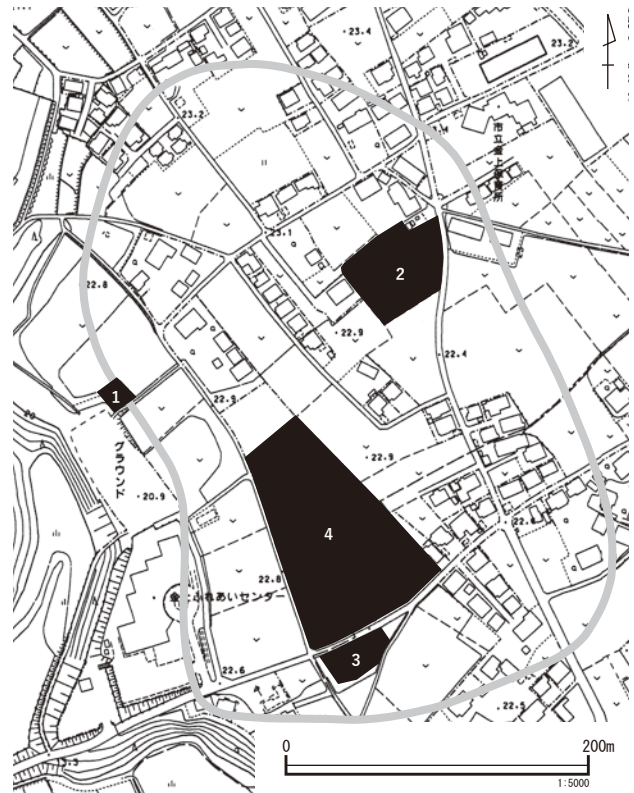
- 1 出土位置・注記：SK3 時代時期：縄文時代早期後葉 器種：深鉢形土器カ 文様：内外面条痕文 備考：胎土に繊維含む
- 2 出土位置・注記：SK3 時代時期：縄文時代前期後半（浮島式） 器種：深鉢形土器 文様：貝殻波状文（サルボウ属） 備考：胎土に細かい砂粒を多く含む
- 3 出土位置・注記：SK1 時代時期：縄文時代前期（浮島式） 器種：深鉢形土器 文様：連続刺突文（半裁竹管） 備考：胎土に細かい砂粒を多く含む、器内面わずかに磨き
- 4 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代前期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL） 備考：胎土に黒色粒多量、海綿骨針微量に含む、繊維を含むカ
- 5 出土位置・注記：SK1 時代時期：縄文時代前期 器種：不明 文様：平行沈線文（半裁竹管） 備考：器内面磨き
- 6 出土位置・注記：SK3 時代時期：縄文時代前期カ 備考：器内面大きく剥落
- 7 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式カ） 器種：深鉢形土器 文様：沈線文、単節斜縄文（LR） 備考：器内面磨き
- 8 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期（加曾利E式カ） 器種：深鉢形土器 文様：沈線文、単節斜縄文（RL） 備考：器内面磨き、胎土に海綿骨針含む
- 9 出土位置・注記：3トレ 時代時期：縄文時代中期カ 器種：深鉢形土器 文様：沈線文（棒状工具カ） 備考：器内面磨き
- 10 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 備考：胎土に海綿骨針含む
- 11 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期カ 器種：深鉢形土器 備考：不透明粒が多く入る
- 12 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 法量：低径56mm（残存率31%） 備考：器外面磨き

5 金上向山遺跡

(1) 第4次調査報告

調査地は、那珂川低地から北方へ入り込む谷から100mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑であった。調査は16か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.3～0.6mを測る。調査の結果、住居跡19基、溝跡8条、土坑5基、ピット8基が確認された。住居跡は出土遺物からみて全て奈良・平安時代と思われる。土坑・溝跡・ピットは出土遺物がなく時期不明であるが、2号土坑は覆土が硬く明褐色土を基調としているため、縄文時代以前の土坑の可能性が高い。

調査区からは縄文土器・土師器・須恵器・陶器が出土



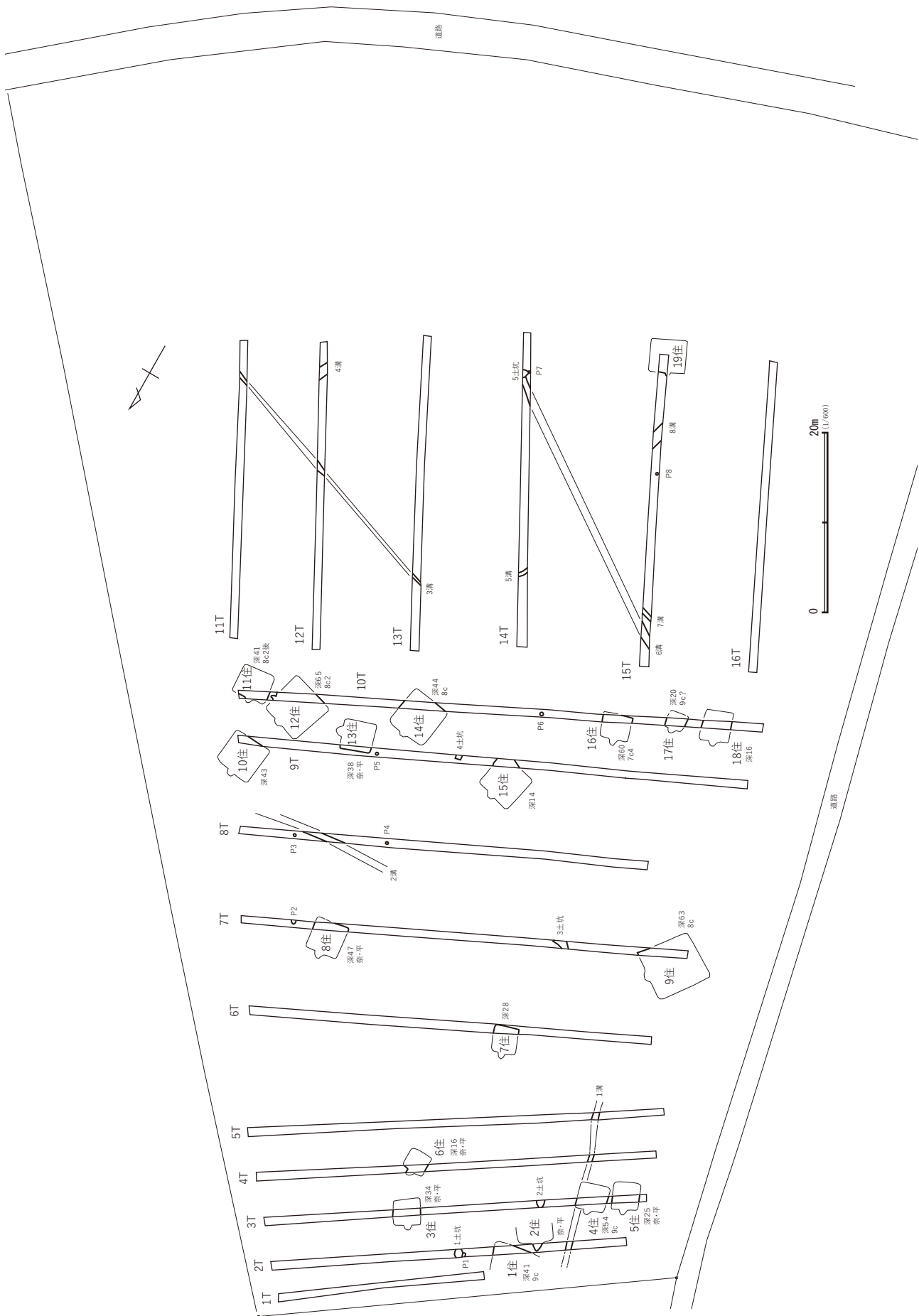
第15図 金上向山遺跡の調査地点（数字は調査回数）

した。

遺物説明

第17図

- 1 出土位置：4トレンチ 注記：— 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部25% 法量：底径（8.2） 色調：灰白色 胎土：礫（白透少），砂（白透，灰），骨針少 技法等：回転ヘラ切り未調整 備考：木葉下窯産か
- 2 出土位置：12トレンチ 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部30% 法量：底径（5.6） 色調：外面体部灰色褐色・底部灰色，内面灰色 胎土：砂（白，透） 特徴：回転ヘラ切。底部外面ヘラ記号（ヘラ文字？）
- 3 出土位置：2トレンチ1住 注記：— 材質：須恵器 器種：杯 残存：体部片 法量：— 色調：暗灰色 胎土：砂（白，白透），白雲母多 技法等：外面体部下端手持ヘラ削り。体部外面ヘラ書き（文字不明）。口唇部摩滅。 備考：新治窯産
- 4 出土位置：2トレンチ1住 注記：— 材質：須恵器 器種：有台杯 残存：体部10% 法量：口径（12.6） 色調：灰色 胎土：砂（白透少），白雲母多 技法等：口唇部摩滅 備考：新治窯産
- 5 出土位置：3トレンチ4住 注記：— 材質：須恵器 器種：有台盤 残存：口縁部20% 法量：口径（16.6） 色調：灰色 胎土：礫（白多，白透），砂（白，灰，白透），骨針微量 技法等：口唇部摩滅 備考：木葉下窯産か
- 6 出土位置：12住 材質：須恵器 器種：蓋 残存：50%（口縁部・鈕部一部欠） 法量：口径（14.5），器3.0，鈕径3.3，鈕高0.7 色調：灰色（口縁部内外面暗色） 胎土：礫（白），砂（白），骨針 特徴：天井部外面回転ヘラ削り。鈕上面周縁部と口唇部摩滅。口縁部外面と内面中央部やや摩滅。 備考：木葉下窯産か
- 7 出土位置：11住 材質：須恵器 器種：蓋 残存：体部20% 法量：口径（16.3） 色調：明褐色，外面外周部明褐橙褐色 胎土：礫（白少），



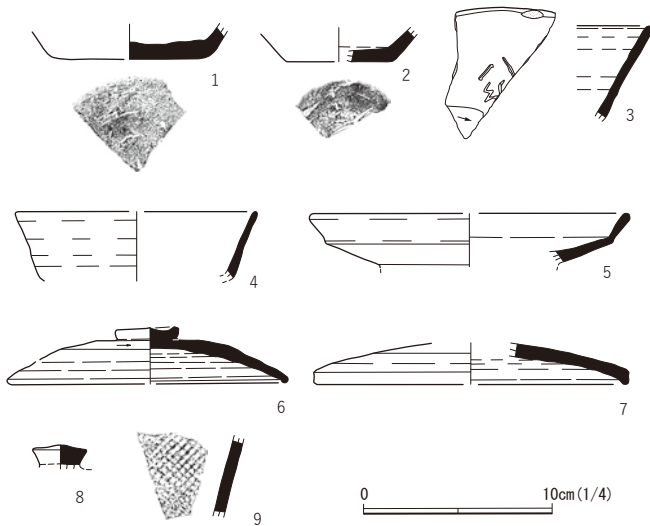
第16図 金上山遺跡第4次調査区

6 三反田古墳群

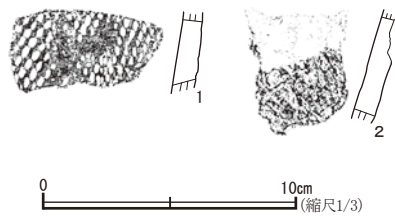
(1) 第7次調査報告

調査地は、中丸川低地を望む台地縁辺から260m、那珂川低地を望む台地縁辺から400mほど離れた地点に位置し南にゆるく傾斜する地形を呈する。調査は7カ所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。トレンチの深さは0.5～0.8mを測る。調査の結果、溝跡1条が確認された。遺物は溝跡底面から須恵器大甕の破片が1点出土した。

溝跡は確認面幅1m弱、確認面からの深さ0.8mを測る。溝底面より須恵器大甕が出土したため、奈良時代頃の溝になる可能性がある。近くに立地する三反田古墳群第14号墳の周溝と比較したところ溝の方角は異なっていた(第20図)。ただし、溝覆土の色調が黒色味を帯びる点は第14号墳周溝と共通し、また底部から須恵器の出土をみているので、第14号墳との関係を考慮しておいた方がよいかもしれない。



第17図 金上向山遺跡第4次調査区出土遺物(1)



第18図 金上向山遺跡第4次調査区出土遺物(2)

砂(白,透少) 特徴:天井部外面回転へら削り

8 出土位置:11住 材質:須恵器 器種:蓋 残存:鈕部(外周一部欠失)

法量:鈕経2.8,鈕高1.3 色調:灰色 胎土:砂(白) 特徴:—

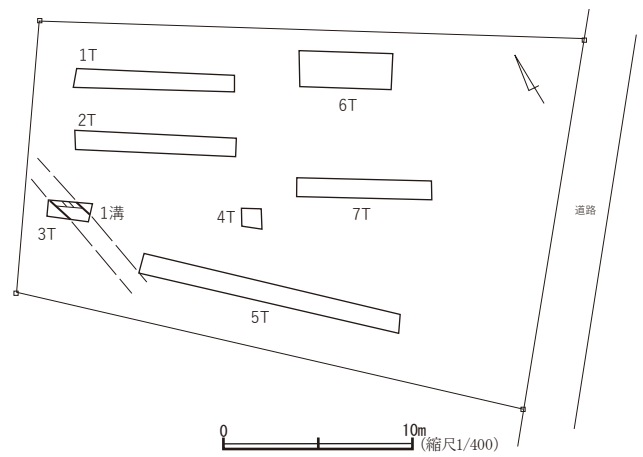
9 出土位置:3トレンチ2住 注記:— 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:— 色調:外面橙色,内面明灰褐色 胎土:砂(白透),白雲母多 技法等:外面平行線文叩き 備考:新治窯産

第18図

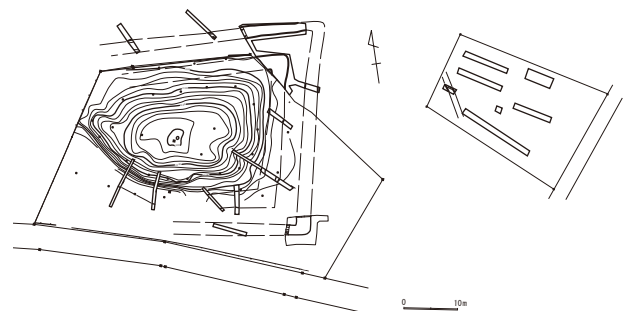
1 出土位置・注記:8トレ 時代時期:縄文時代早期(撚糸文系,花輪台式カ) 器種:深鉢形土器 文様:撚糸文(R) 備考:器外面磨き後に撚糸文施文,器内面磨き

2 出土位置・注記:8トレ 時代時期:縄文時代早期カ 器種:深鉢形土器 備考:胎土に1～4mmの不透明粒含む

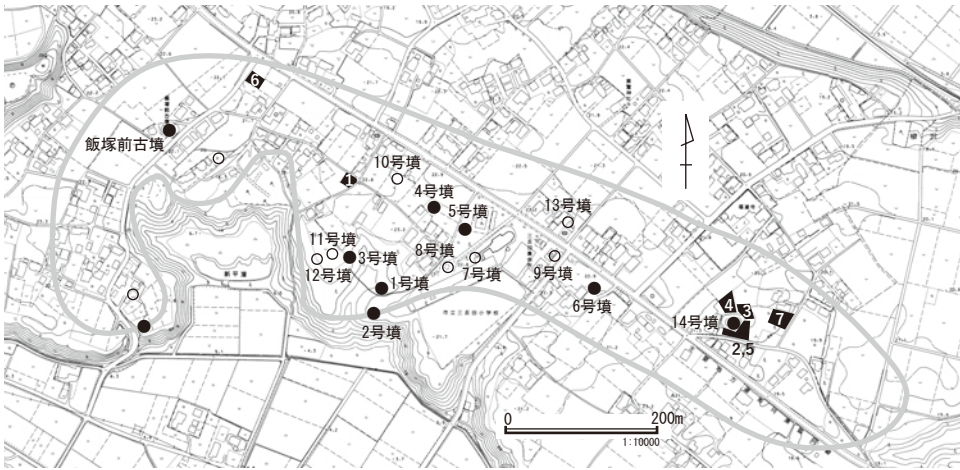
3 出土位置・注記:16住覆土 時代時期:縄文時代カ 器種:石錐 石材:玉髓(帯淡褐白半透明,塊状,硬度高い) 法量:長さ21.5mm,幅14mm,厚さ4.5mm,重さ1.06g 備考:先端部に使用による擦痕は見られない。裏面先端近く表面が一部平滑。



第19図 三反田古墳群第7次調査区



第20図 三反田古墳群第14号墳と第7次調査区の位置関係



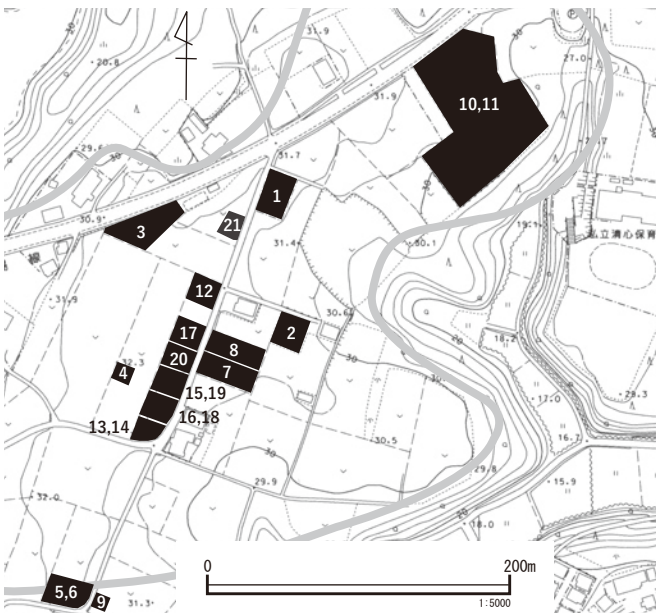
第 21 図 三反田古墳群の調査地点 (数字は調査次数)

トレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.5～0.7 mを測る。調査の結果、住居跡1基、溝跡1条が確認された。1号住居跡は出土した土師器小片から古墳時代かと思われる。1号溝跡は出土遺物がなく時期は不明である。調査区からは土師器片、鉄滓が出土した。

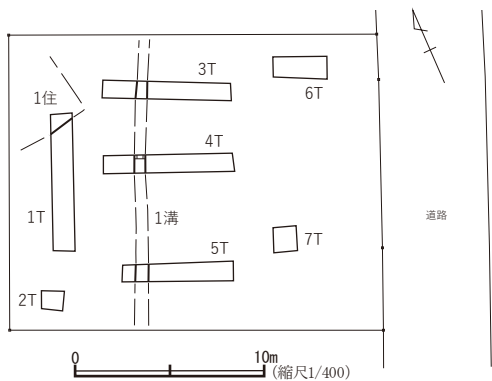
7 高野富士山遺跡

(1) 第 20 次調査報告

調査地は、新川が流れる旧真崎浦の低地から南西方向に入り込む二つの谷に挟まれた台地上に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は7か所の



第 22 図 高野富士山遺跡の調査地点 (数字は調査次数)

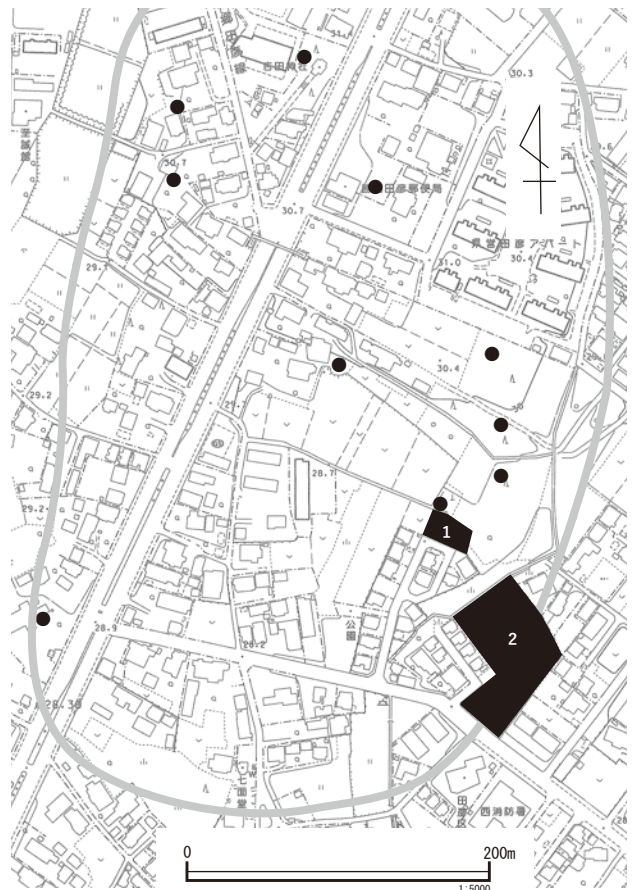


第 23 図 高野富士山遺跡第 20 次調査区

8 田彦古墳群

(1) 第 2 次調査報告

調査地は、西方を南流する中丸川の低地から 400 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 10 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.3～0.9 mを測る。調査の結果、溝跡2条、土坑1基、ピッ



第 24 図 田彦古墳群の調査地点 (数字は調査次数)

9 柳沢十二所遺跡

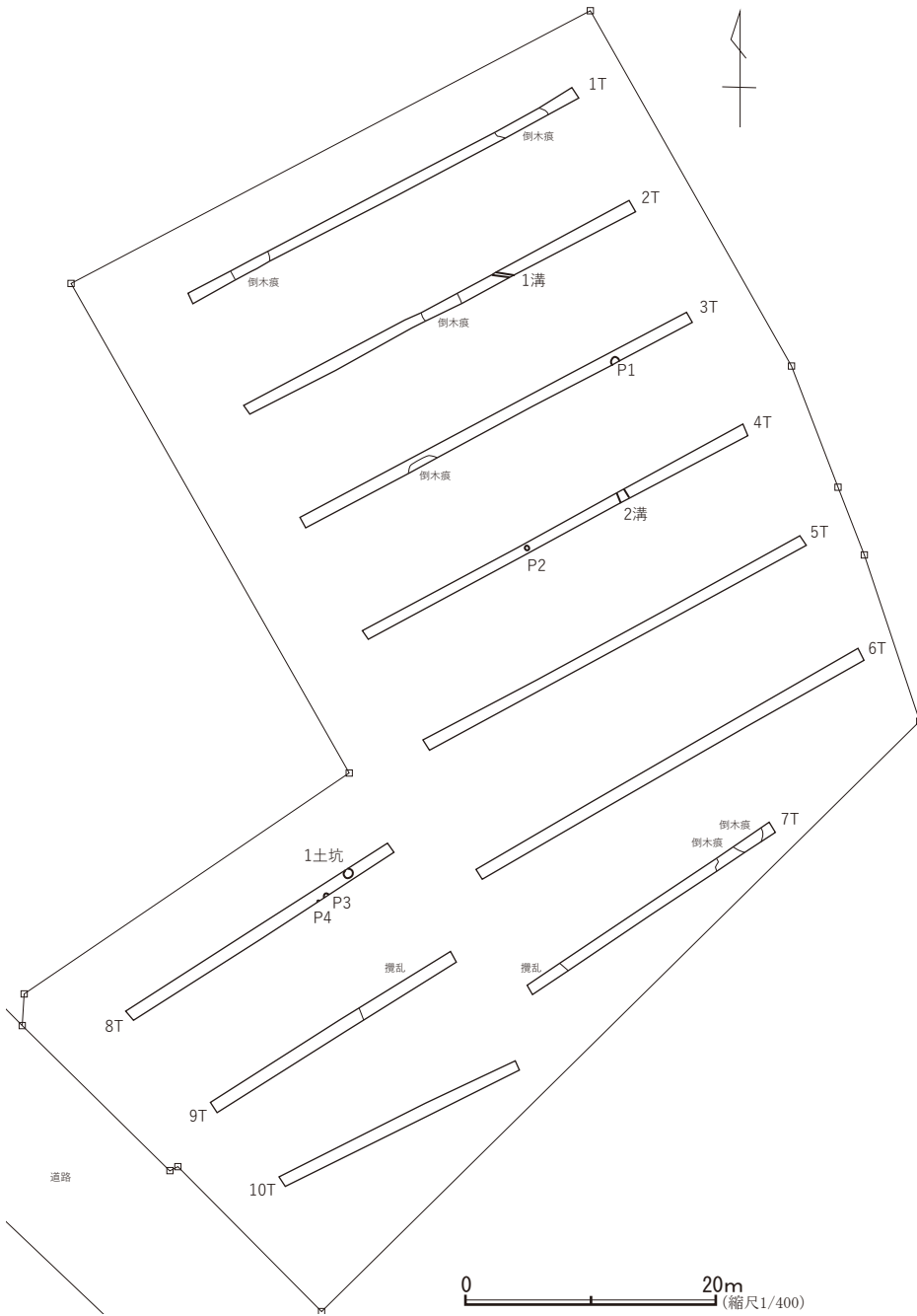
(1) 第2次調査報告

調査地は、中丸川低地を望む台地縁辺部に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑であった。調査は6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.7 mを測る。調査の結果、土坑1基が確認された。縄文土器片が出土したところからみて、縄文時代の土坑と思われる。調査区からは縄文土器の破片が少量出土した。

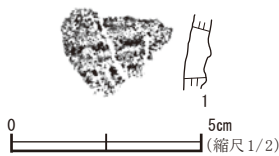
遺物説明

第29図

- 1 出土位置・注記：SK1 時代時期：縄文時代早期（天矢場式） 器種：深鉢形土器 文様：擦痕 備考：胎土にわずかに銀雲母、1 mm程度の不透明粒含む。器内面の色調が黒褐色
- 2 出土位置・注記：SK1 時代時期：縄文時代後期（堀之内式） 器種：深鉢形土器 文様：沈線文、単節斜縄文（LR） 備考：1～5 mmの白色粒含む



第25図 田彦古墳群第2次調査区



第26図 田彦古墳群第2次調査区出土遺物

遺物説明

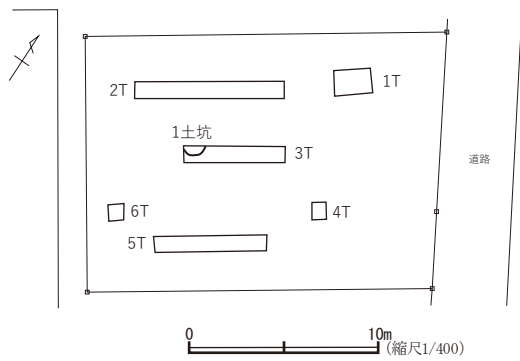
第26図

- 1 出土位置・注記：5トレ 時代時期：縄文時代草創期（隆起線文土器） 文様：器外面に2条の隆起線 備考：器外面一部剥落

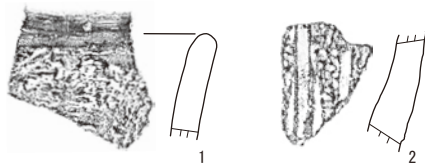
ト4基が確認された。いずれも出土遺物はなく時期は不明である。調査区からは縄文土器・土師器の小片が少量出土した。



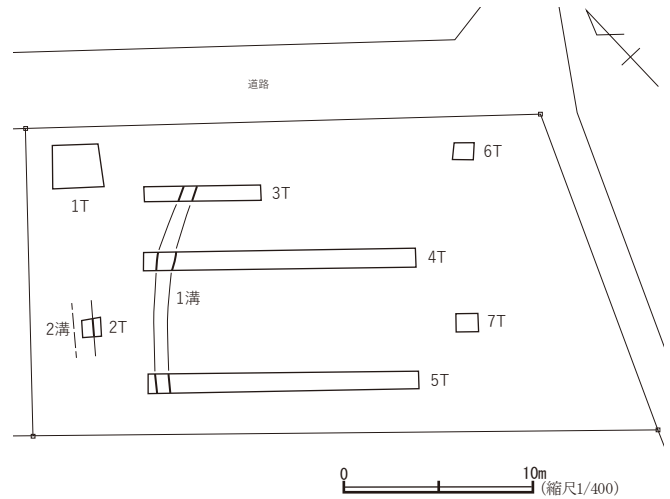
第27図 柳沢十二所遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第28図 柳沢十二所遺跡第2次調査区



第29図 柳沢十二所遺跡第2次調査区出土遺物



第31図 平磯宮上遺跡第2次調査区

10 平磯宮上遺跡

(1) 第2次調査報告

調査地は、海岸を望む台地縁部部の平坦地であり、調査時は宅地であった。調査地から海岸までの距離は250mほどである。調査は7か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.7～0.8mを測る。調査の結果、時期不明の溝跡が2条確認された。調査区から遺物は出土しなかった。

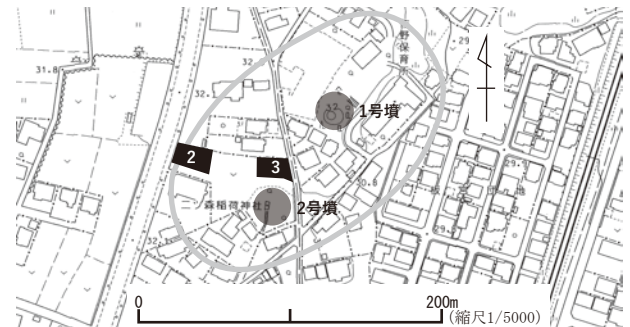


第30図 平磯宮上遺跡の調査地点 (数字は調査回数)

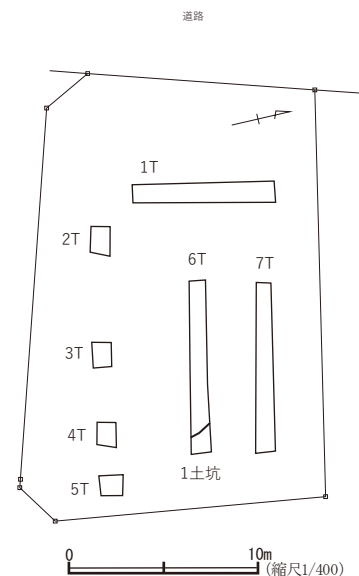
11 ニッ森古墳群

(1) 第2次調査報告

調査地は、新川の低地から南西方向へ入り込む小支谷の谷頭付近に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は7か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.8～1.1



第32図 ニッ森古墳群の調査地点 (数字は調査回数)



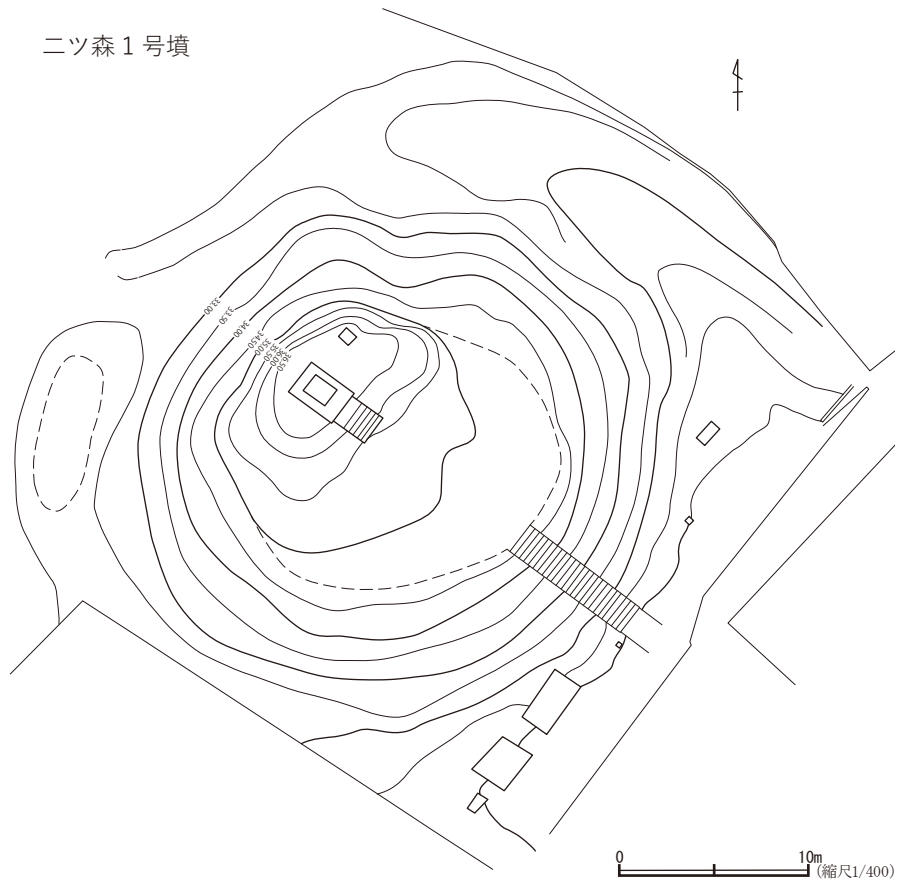
第33図 ニッ森古墳群第2次調査区

mを測る。調査の結果、時期不明の土坑1基が確認された。遺物は出土しなかった。

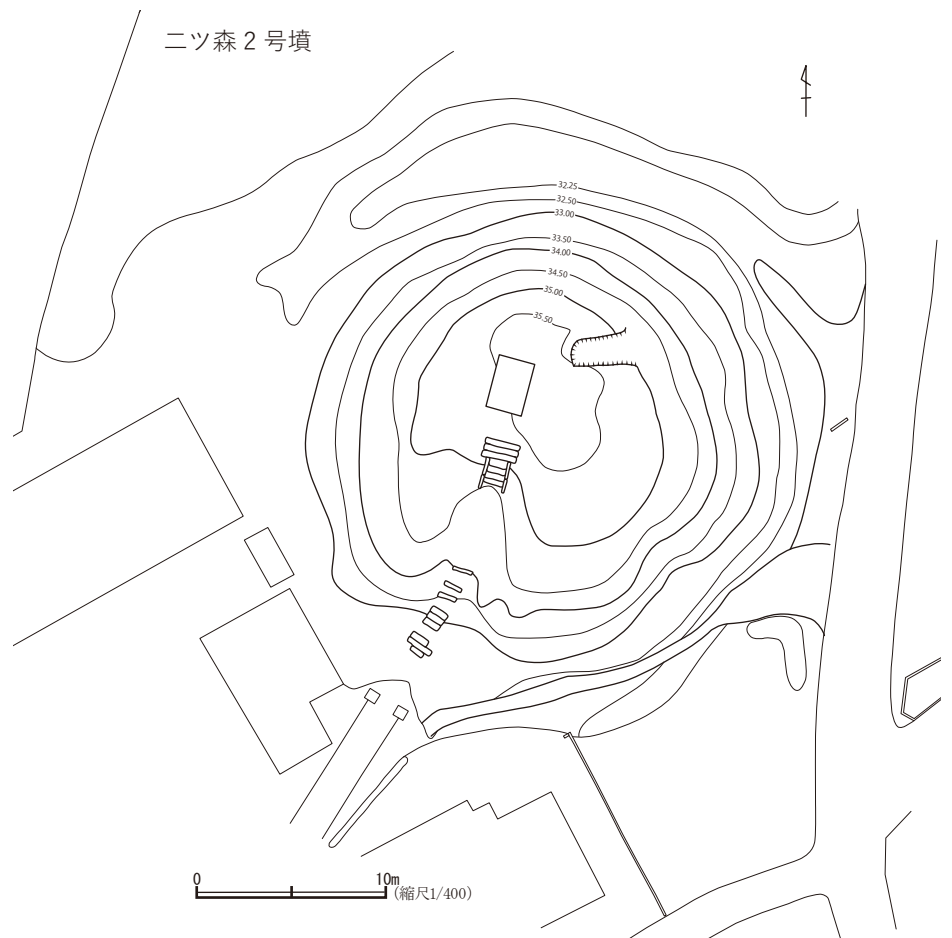
なお参考までに、勝田市史編纂事業の際に作成し未報告となっていた1・2号墳の測量図を掲載した(第34図)。その図によると、1号墳は直径28m、高さ3.5m、2号墳は直径25m、高さ3.5mほどを測る平面円形の塚であり、いずれも頂部には祠が設置されている。いずれも埴輪や石室石材等は確認されていない。古墳の可能性も残るが、1・2号墳の間を通る道が村境にあっており、1号墳が旧高場村地内、2号墳が旧稲田村地内となることや、二つの塚の規模が類似することなどを考えると、境塚である可能性が高いように思われる。市内において境塚の可能性のある類例を探すと、大沼経塚で調査された2基の塚を挙げることができる。

二ツ森古墳群が古墳なのか、それとも中世以後の境塚かを定めるには、発掘調査の実施が必要であろう。

二ツ森1号墳



二ツ森2号墳

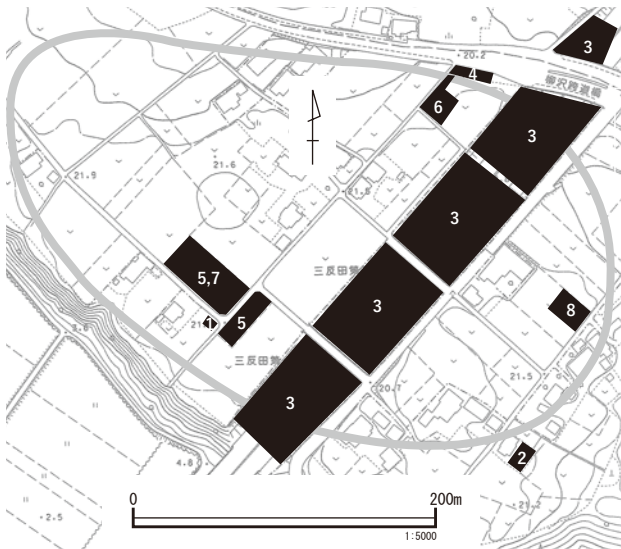


第34図 二ツ森古墳群1・2号墳測量図(勝田市史編纂事業における測量図をトレース)

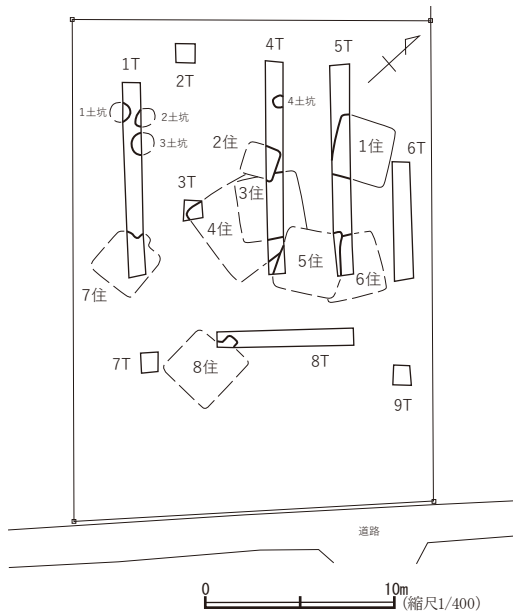
12 下高井遺跡

(1) 第8次調査報告

調査地は、那珂川の低地から北方向へ入り込む、現在ため池となっている小支谷の西側台地上に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑であった。調査は9か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.8mを測る。調査の結果、住居跡8基、土坑4基が確認された。住居跡は遺物から3・7号住居跡が古墳時代、2号住居跡が9世紀と思われる。その他の住居跡は遺物がなく時期不明であるが、トレンチからの出土遺物からみて古墳～平安時代の住居跡と思われる。土坑は遺物がなく時期不明である。なお調査区



第35図 下高井遺跡の調査地点（数字は調査回数）



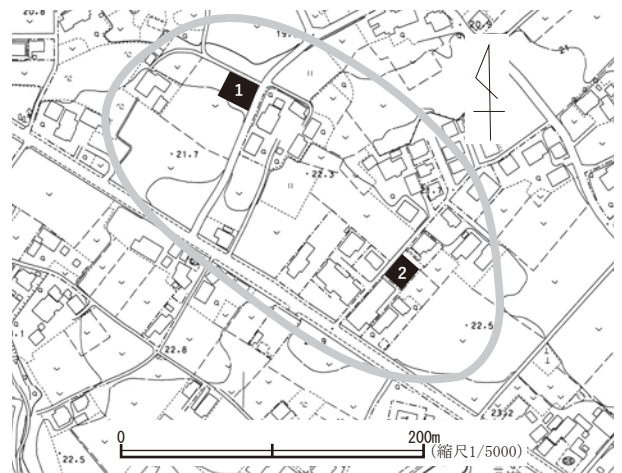
第36図 下高井遺跡第8次調査区

からは土師器・須恵器・陶器が出土した。なお当調査区はその後本調査が実施されており、その内容は令和6年度報告書において報告する予定である。

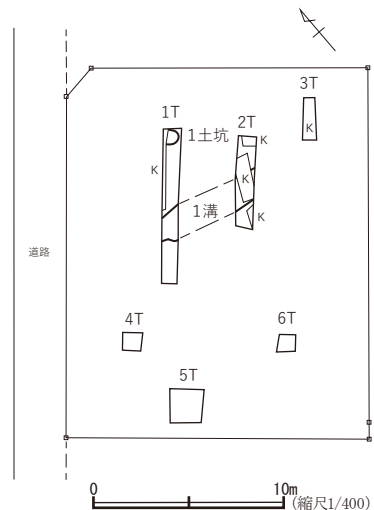
13 蛭塚西貝塚

(1) 第2次調査報告

調査地は、中丸川低地を望む台地縁辺から250mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は土盛りの上に碎石が敷かれた空地であった。調査は6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.9～1.3mを測る。調査の結果、溝跡1条、土坑1基が確認された。溝跡・土坑とも遺物がなく時期不明である。調査区表土から土師器片1点、縄文土器片1点が出土した。なお調査区は全体的に50cmほど土盛りされていた。



第37図 蛭塚西貝塚の調査地点（数字は調査回数）

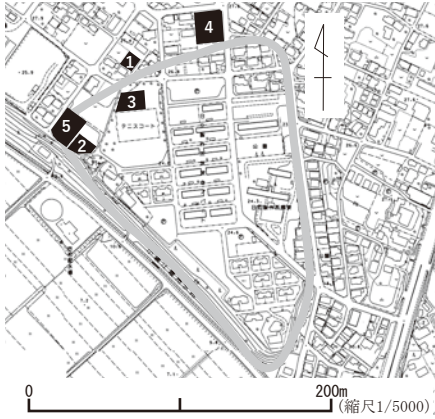


第38図 蛭塚西貝塚第2次調査区

14 筑波台遺跡

(1) 第5次調査報告

調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺部に位置し、南西にやや傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去



第39図 筑波台遺跡の調査地点（数字は調査回数）

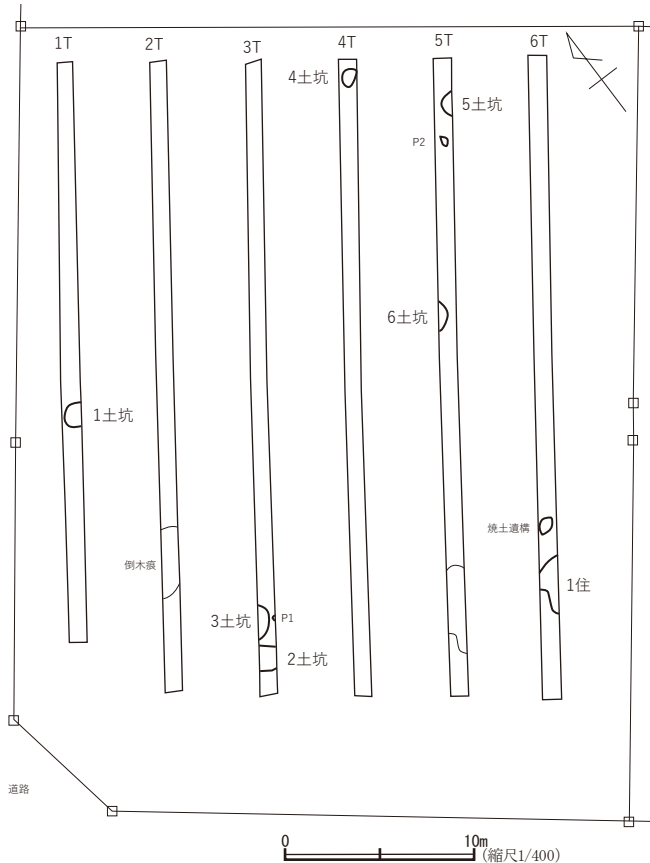


第40図 筑波台遺跡第5次調査区出土遺物

を実施した。確認面までの深さは0.3～0.6mを測る。

調査の結果、住居跡1基、土坑6基、ピット2基が確認された。

調査区のおよそ半分から北側では、表土を除去すると鹿沼パミス層



第41図 筑波台遺跡第5次調査区

が露出する部分があり、過去に大きく掘削を受けていると考えられる。第5・6号土坑は出土遺物から古墳時代頃の土坑であると推定される。また6トレンチでは焼土遺構が確認され、そこから炭化物が付着した石が出土しているが遺構の性格は不明である。その他の遺構は出土遺物がないため時期は不明である。

遺物は、弥生土器、土師器、中世土器、かわらけ、陶器、近世以後の瓦、焼けた礫、鉄製品が出土したが、礫以外はいずれも破片が少量出土したのみである。

遺物説明

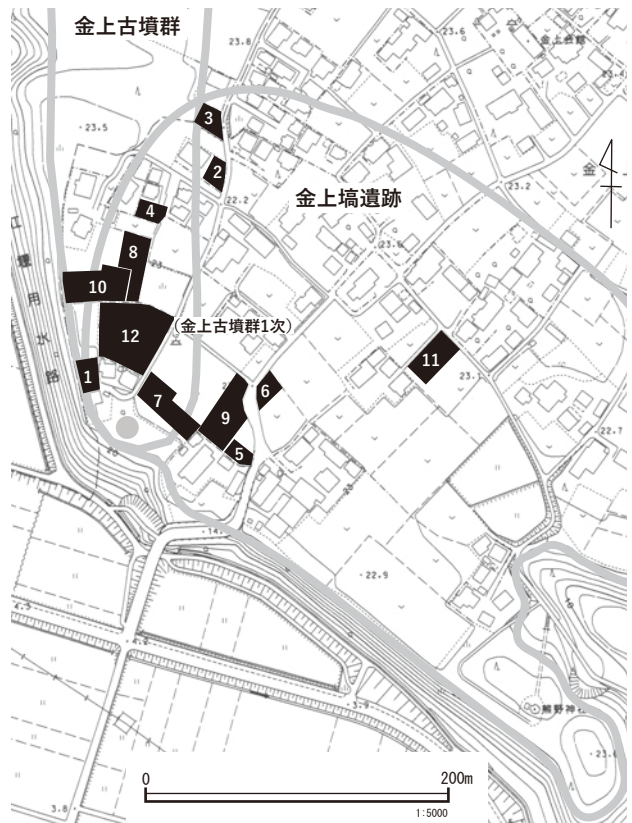
第40図

1 出土位置・注記：6トレ 時代時期：弥生時代後期 器種：— 文様：柳描文（4本）

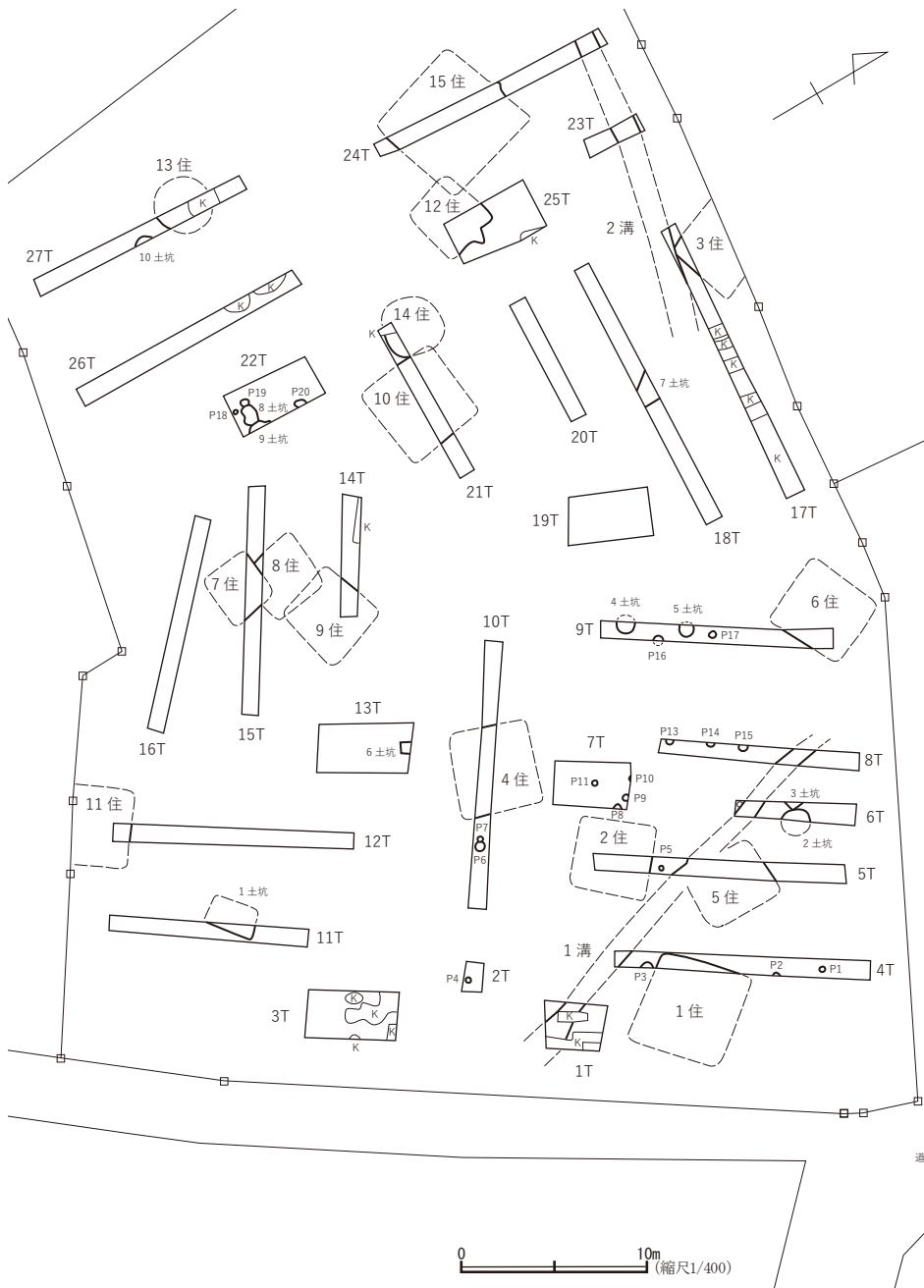
15 金上埜遺跡・金上古墳群

(1) 金上埜遺跡第12次・金上古墳群第1次調査報告

調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺部に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は27か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施し



第42図 金上埜遺跡・金上古墳群の調査地点（数字は金上埜遺跡の調査回数）



第 43 図 金上埜遺跡第 12 次・金上古墳群第 1 次調査区

た。確認面までの深さは 0.4～1.0 m を測る。

調査の結果、住居跡 15 基、土坑 10 基、溝跡 2 条、ピット 20 基が確認された。第 6・12・15 住居跡は出土遺物から 9 世紀頃と考えられる。また第 13・14 号住居跡は円形の住居跡と考えられ、調査区から縄文土器が出土していることからみると、縄文時代の住居跡になる可能性がある。なお第 8 号土坑の近くから尖頭器が出土している。他の遺構は時期を特定できる遺物が少ないため時期が不明である。調査区からは縄文土器・土師器・須恵器、砥石が出土した。

遺物説明

第 44 図

- 1 出土位置・注記：9トレ 時代時期：縄文時代前期前葉 器種：深鉢形土器カ 文様：単節斜縄文 (RL) 備考：胎土に織維含む
- 2 出土位置・注記：21トレ 時代時期：縄文時代中期中葉 器種：深鉢形土器カ 文様：沈線文、角押文 備考：器内面磨き
- 3 出土位置・注記：22トレ 時代時期：不明 器種：尖頭器 石材：デイスイト (塊状、斑状、石基微晶質、斑晶〔長石、斜方輝石、石英、磁鉄鉱〕) 法量：長さ 118 mm、幅 39 mm、厚さ 15 mm、重さ 57.09g

16 磯合古墳群

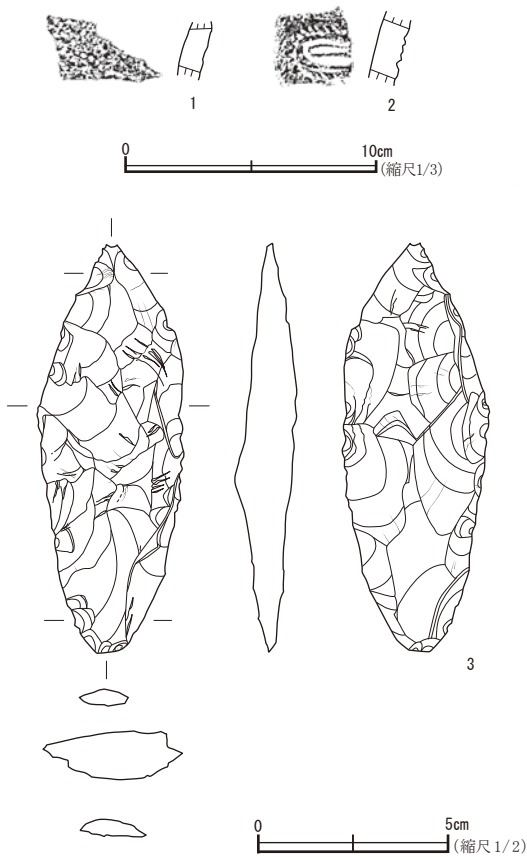
(1) 第 9 次調査報告

調査地は、海岸に面する台地縁辺部から 270m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は 20 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2～0.8 m を測る。

調査の結果、古墳 1 基、ピット 1 基が確認された。古墳は周溝と石室の一部と思われる石が検出された。確認できた周溝の広がりから、周溝の外周の直径

は約 19 m と推測される。6 トレンチにみられた石室と思われる石は 5～20 cm の礫が多く、石室の床面が露出している可能性があり、6 トレンチ北西側の地面上には、石室の一部とみられる石が置かれていた。1・12 トレンチには主体部の堀形が検出されたことから、推定される古墳の南寄りの部分に主体部が存在すると考えられ、南向きに開口する石室であった可能性がある。

今回確認された古墳の南東約 100m の場所には、直径約 26.5 m、高さ約 4 m の円墳である赤坂稲荷古墳があり、墳丘の南側に横穴式石室を持つ。赤坂稲荷古墳では埴輪等の遺物が確認されておらず、7 世紀頃の古墳と推



第44図 金上埜遺跡第12次・金上古墳群第1次調査区出土遺物



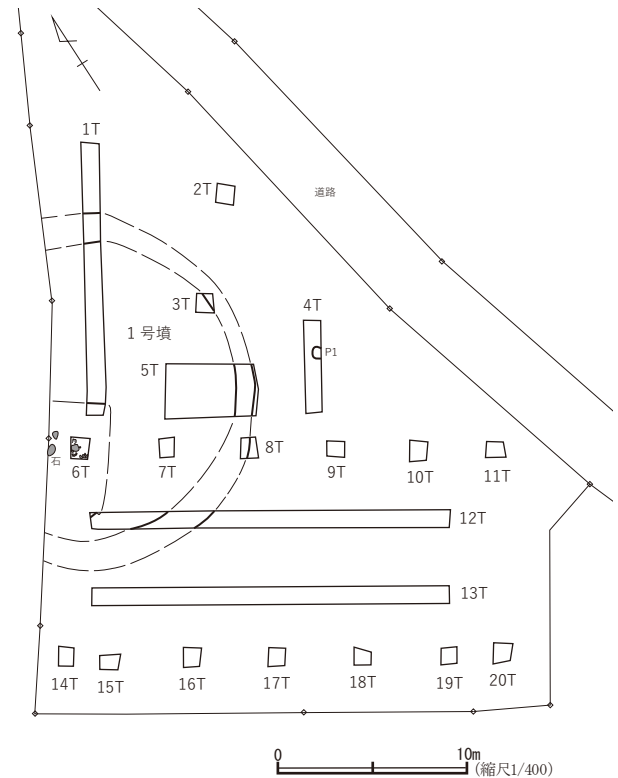
第45図 磯合古墳群の調査地点（数字は調査回数）

定されている。調査した古墳からも埴輪等の遺物は出土しなかったことから、同時期頃の古墳である可能性は高いと思われる。

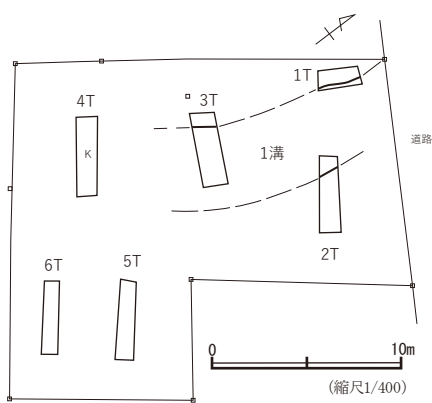
(2) 第10次調査報告

調査地は、海岸に面する台地縁辺部から60mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.7～1.5mを測る。

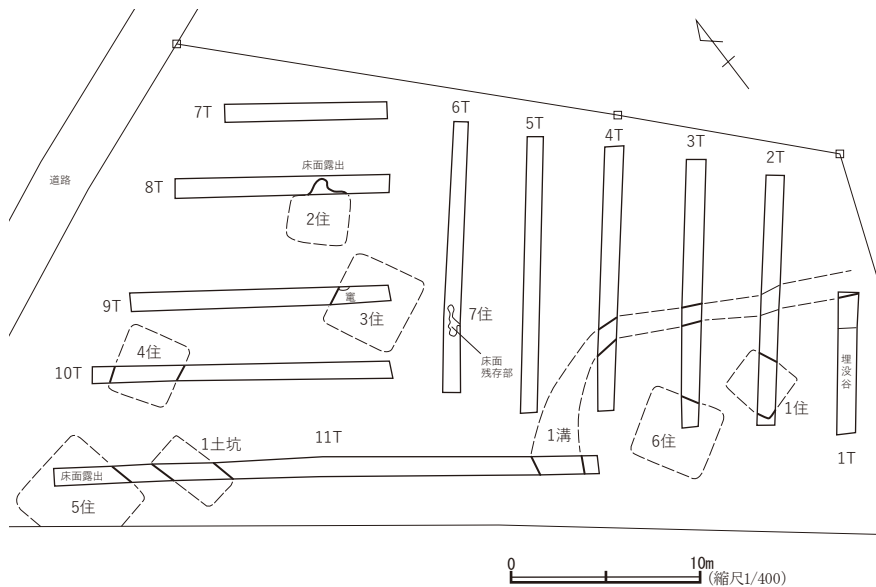
調査の結果、溝跡1条が確認された。溝跡は幅約4.5m、深さ約1.0mを測る。国土地理院の1960年代の航空写真をみると、古墳のように見える円形の区画があり、それと1号溝の位置が合うことや、過去に当地で塚が確認されていることからみて、溝跡は、やや大型の円墳の周溝であると考えられる。なお調査区から出土遺物はなかった。



第46図 磯合古墳群第9次調査区



第 47 図 磯合古墳群第 10 次調査区

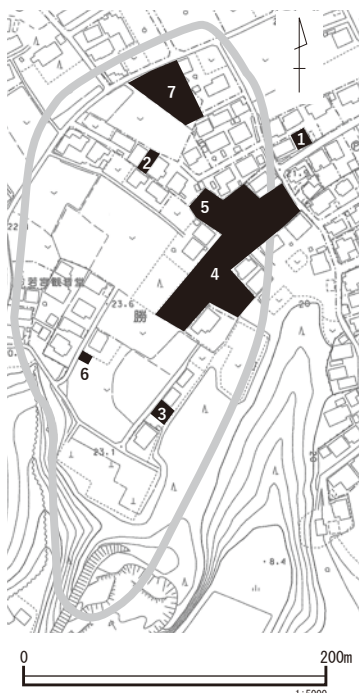


第 49 図 勝倉若宮遺跡第 7 次調査区

17 勝倉若宮遺跡

(1) 第 7 次調査報告

調査地は、那珂川低地から北方向に入り込む谷の谷頭から 170 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 11 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.3 ~ 0.6 m を測る。調査の結果、住居跡 7 基、土坑 1 基、溝跡 1 条が確認された。調査区は、耕作のため天地返しが行われ攪乱を受けており、第 2・5・7 号住居跡は、床面やその一部しか確認できなかった。出土遺物から、第 1 号住居跡は 8 世紀第 1 四半期、第 2 号住居跡は 9 世紀から 10 世紀、第 5 号住居跡・土坑は 9 世紀頃と推測される。その他の遺構は時期を特定できる遺



第 48 図 勝倉若宮遺跡の調査地点
(数字は調査回数)

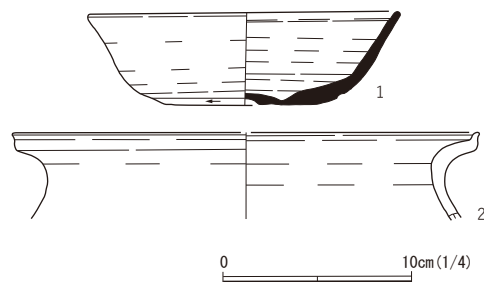
物がないため時期不明である。調査区からは、弥生土器・土師器・須恵器・陶器が出土している。

遺物説明

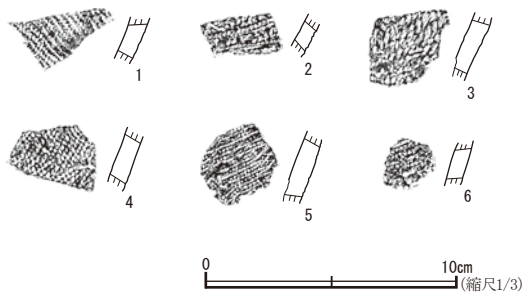
第 50 図

1 出土位置：1 住 材質：須恵器 器種：杯 残存：口縁部 50% 欠失 法量：口径 16.3、器高 4.9、底径 11.2 色調：明褐色 胎土：礫（白透多，白）、白雲母多 技法等：底部外面回転ヘラ削り。口唇部磨滅。口縁部ところどころ小さく欠失する。焼成軟質。備考：新治窯産

2 出土位置：5 住 材質：



第 50 図 勝倉若宮遺跡第 7 次調査区出土遺物 (1)



第 51 図 勝倉若宮遺跡第 7 次調査区出土遺物 (2)

土師器 器種：甗 残存：口縁部 15% 法量：口径 (24.5) 色調：黒褐色、褐色 胎土：礫（白透多），白雲母多 技法等：口縁部ヨコナデ 備考：新治窯付近産

第 51 図

- 1 出土位置・注記：1 トレ 1 ミゾ 時代時期：弥生時代中期 器種：壺形土器カ 文様：単節斜縄文 (RL)
- 2 出土位置・注記：11 トレ 1 ミゾ 時代時期：弥生時代中期 器種：— 文様：付加条縄文 (LR+2R カ)
- 3 出土位置・注記：2 トレ 1 住 時代時期：弥生時代中期 器種：壺形土器カ 文様：単節斜縄文 (LR) カ 備考：器内面一部剥落
- 4 出土位置・注記：2 トレ 時代時期：弥生時代中期 器種：壺形土器カ 文様：単節斜縄文 (LR) 備考：胎土に金雲母微量に含む
- 5 出土位置・注記：5 トレ 時代時期：弥生時代中期 器種：壺形土器

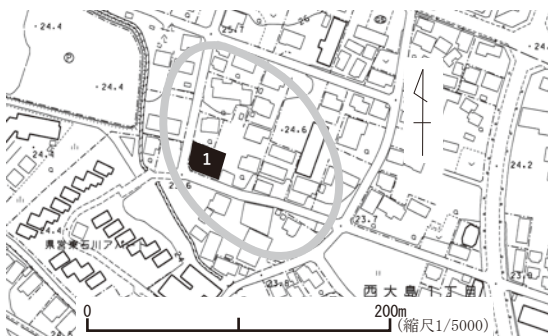
文様：付加条縄文 (LR+2R) 備考：器内面一部剥落

6 出土位置・注記：8トレ 時代時期：弥生時代中期 器種：一 文様：単節斜縄文 (LR)

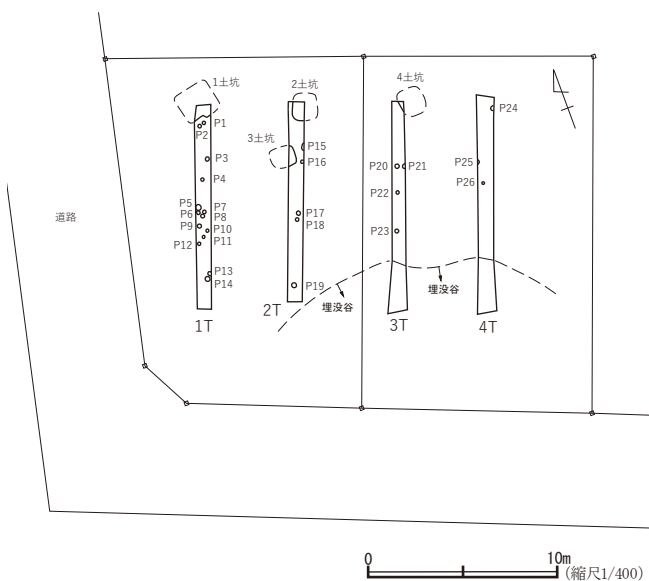
18 塙坪遺跡

(1) 第1次調査報告

調査地は、中丸川低地脇の緩傾斜面に位置する。調査時は砂利敷きの駐車場であった。調査は4か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.8～1.2mを測る。調査の結果、土坑4基、ピット26基が確認された。調査区からの遺物がなかったため、遺構の時期は不明である。3・4トレンチ南側には黒色土の範囲があり、埋没谷が広がっていると考えられる。その黒色土からは、水が湧き出していた。



第52図 塙坪遺跡の調査地点 (数字は調査回数)



第53図 塙坪遺跡第1次調査区

III 2022年調査の出土遺物

1 柴田遺跡第6次調査出土遺物

(1) 縄文時代の遺物

本稿では、令和4年度市内遺跡発掘調査報告書にて報告がされた、柴田遺跡第6次調査で出土した資料について解説する。

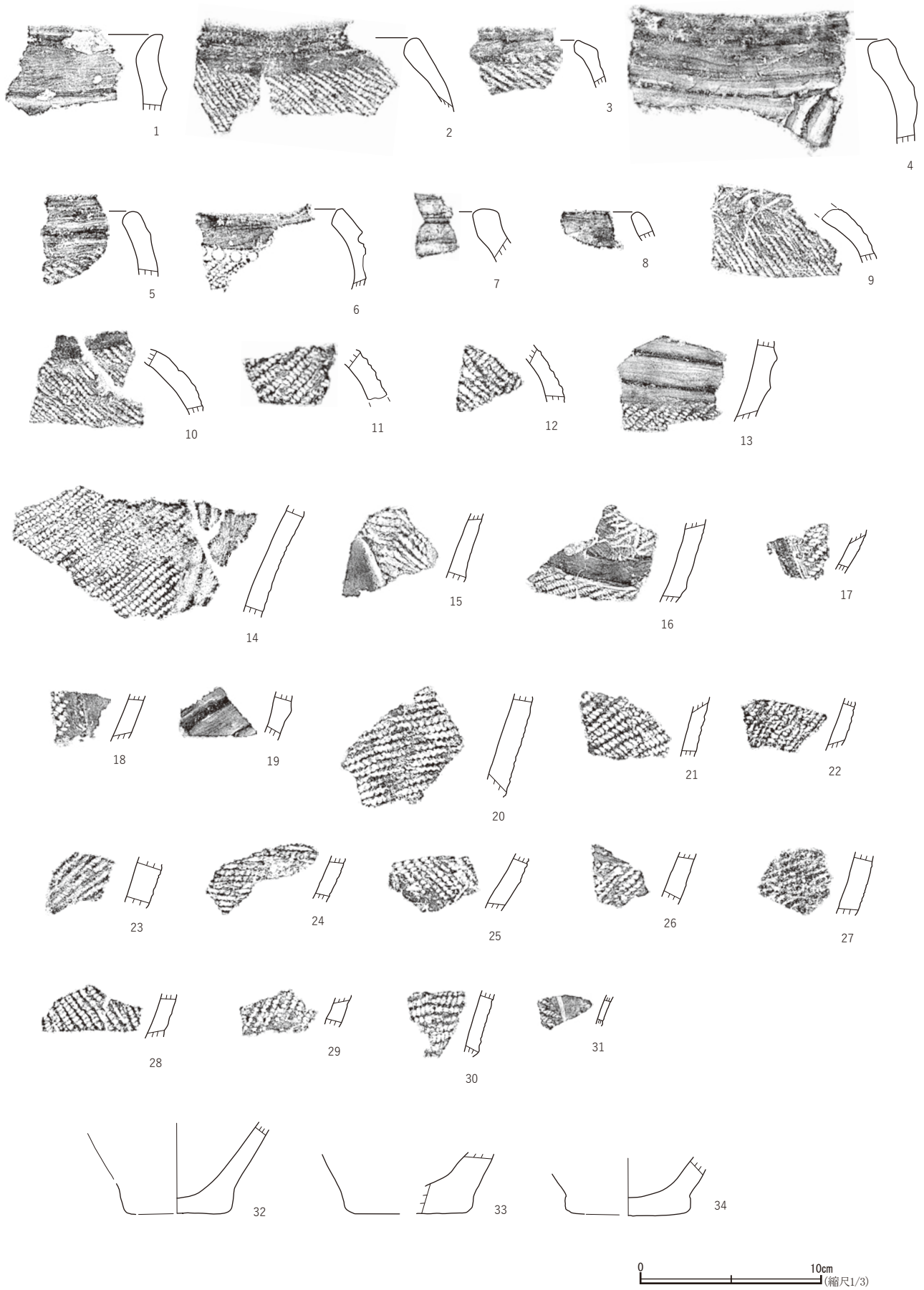
第6次調査では、住居跡1基、土坑1基が確認され、縄文土器、土製品、石器、焼石が出土している。ほとんどの遺物が土坑から確認されている。縄文土器には微隆起線文による区画や縦方向の縄文施文の特徴がみられ、中期後葉の加曽利E3-4中間式・E4式頃に属するものと考えられる。住居跡からもわずかに同時期の土器が確認されている。土製品には、土器片錘、土器片を再利用した有孔土製円盤・土製円盤がみられた。石器は、加工痕がみられないことから、石器製作に伴う剥片と判断した。焼石は住居跡と土坑が検出された1トレンチで確認されたものであり、垂角形の自然礫が割れた形状をしており、自然面が残存する部分に被熱による赤変がみられた。

遺物説明

第54図

- 1 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E3式カ） 器種：深鉢形土器 備考：器内外面磨き、胎土に0.5～4.5mmの白色粒を多く含む
- 2 出土位置・注記：1トレ1住・SK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E3-4式カ） 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LR） 備考：胎土に金雲母、1～5mmの不透明粒を多量に含む
- 3 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E3-4式カ） 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LRカ）
- 4 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E4式） 器種：深鉢形土器 文様：微隆起線文 備考：器内外面一部磨き
- 5 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E4式カ） 器種：深鉢形土器 文様：口縁部に1条の陵あり、無節斜縄文（R）カ
- 6 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期（加曽利E4式） 器種：深鉢形土器 文様：刺突文（棒状工具）、単節斜縄文（RL） 備考：器外面口縁部磨き、ネズミの齧り痕あり
- 7 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 備考：器内外面磨き
- 8 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 備考：器内外面磨き
- 9 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利

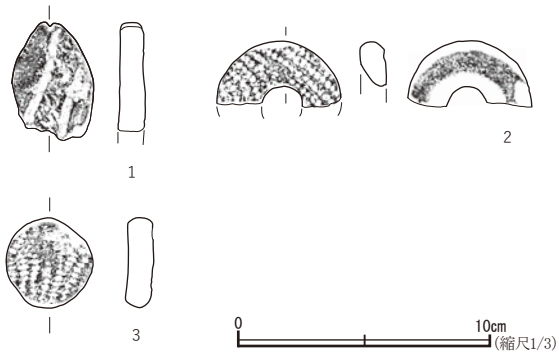
- E3-4式カ） 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LR） 備考：器内面磨き、胎土に黒色粒含む、上部輪積み痕に土器成形時の刻みあり
- 10 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E3-4式） 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LR） 備考：器内面磨き
- 11 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E式） 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 12 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期（加曽利E式） 器種：深鉢形土器カ 文様：単節斜縄文（RL） 備考：器内面磨き
- 13 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E3-4式カ） 器種：深鉢形土器 文様：隆起線文、単節斜縄文（RL） 備考：器内面磨き、胎土に黒色粒含む
- 14 出土位置・注記：1トレ1住 時代時期：縄文時代中期（加曽利E4式カ） 器種：深鉢形土器 文様：微隆起線文、単節斜縄文（RL） 備考：胎土に金雲母を少量含む
- 15 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E4式カ） 器種：深鉢形土器 文様：微隆起線文、単節斜縄文（RLカ） 備考：器外面無文部磨き、器内面磨き
- 16 出土位置・注記：1トレ1住 時代時期：縄文時代中期（加曽利E4式カ） 器種：深鉢形土器 文様：微隆起線文、単節斜縄文（RL） 備考：器内面磨き、器内面にネズミの齧り痕あり
- 17 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代中期（加曽利E4式カ） 器種：深鉢形土器 文様：沈線文、単節斜縄文（RL） 備考：器内面磨き
- 18 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E4式カ） 器種：深鉢形土器カ 文様：微隆起線文、単節斜縄文（RL） 備考：胎土に金雲母多量に含む
- 19 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期（加曽利E式） 器種：深鉢形土器カ 文様：隆起線文 備考：胎土に金雲母含む
- 20 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL） 備考：胎土に金雲母含む、1～4mmの白色・不透明粒を多量に含む
- 21 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL） 備考：胎土に金雲母含む、器内面黒く変色
- 22 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL） 備考：胎土に金雲母多量に含む、器内面炭化物付着
- 23 出土位置・注記：1トレ1住 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL） 備考：1mm程度の白色粒多量に含む
- 24 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（LR） 備考：胎土に金雲母・1～3mm程度の白色粒多量に含む、器内面雑な磨き
- 25 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL）
- 26 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文（RL） 備考：胎土に金雲母多量に含む
- 27 出土位置・注記：1トレSK1 時代時期：縄文時代中期カ 器種：深鉢形土器カ 文様：単節斜縄文（LR）カ 備考：器内面磨き



第 54 図 柴田遺跡第 6 次調査区出土土器

28 出土位置・注記：1トレ SK1 時代時期：縄文時代中・後期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (RLカ)

29 出土位置・注記：1トレ SK1 時代時期：縄文時代中・後期 器種：深鉢形土器カ 文様：単節斜縄文 (RL)



第55図 柴田遺跡第6次調査区出土土製品

30 出土位置・注記：1トレ SK1 時代時期：縄文時代中・後期 器種：深鉢形土器 文様：単節斜縄文 (LR) 備考：器内面にネズミの齧り痕多数あり

31 出土位置・注記：1トレ SK1 時代時期：縄文時代中・後期カ 文様：沈線文, 単節斜縄文 (LR) 備考：器内面磨き

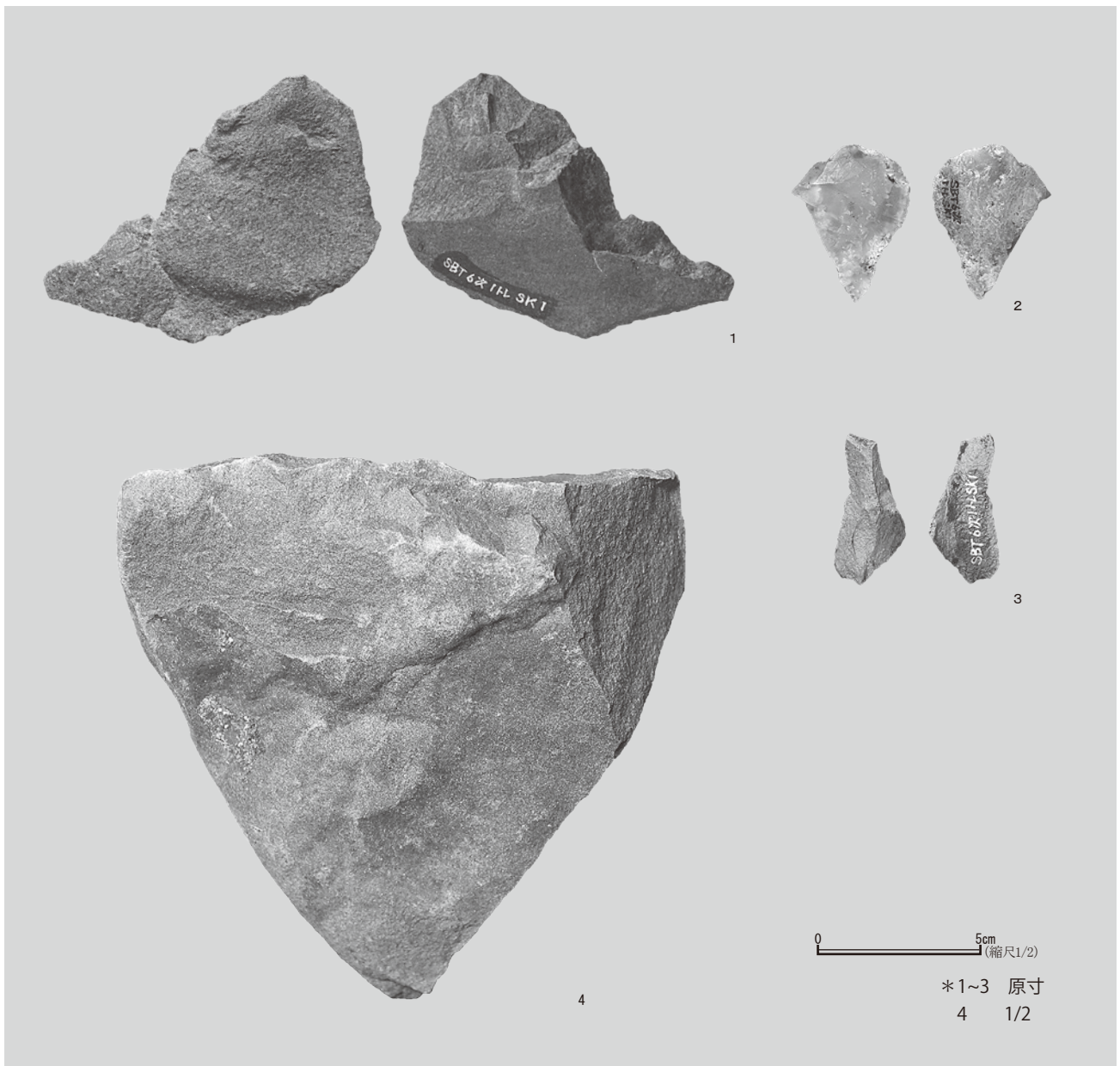
32 出土位置・注記：1トレ1住 時代時期：縄文時代中期(加曾利E3・4式カ) 器種：深鉢形土器 法量：底径57mm(残存率100%) 備考：器外面・底面磨き

33 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期(加曾利E3・4式カ) 器種：深鉢形土器 法量：底径68mm(残存率39%) 備考：器外面磨き, 胎土に金雲母含む

34 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期(加曾利E3・4式カ) 器種：深鉢形土器カ 法量：底径68mm(残存率63%) 備考：器外面磨き

第55図

1 出土位置・注記：表採 時代時期：縄文時代中期 器種：土器片錘



第56図 柴田遺跡第6次調査区出土石器

法量：長さ(47) mm, 幅 32 mm, 厚さ 9 mm, 重さ 16.31 g 備考：耕作による傷が多い

2 出土位置・注記：1トレスK1 時代時期：縄文時代中期 器種：有孔土製円盤 法量：長さ 18 mm, 幅 48 mm, 厚さ 10 mm, 重さ 12.63 g 備考：土器片転用, 単節斜縄文 (RL), 胎土に金雲母・白色粒多量に含む

3 出土位置・注記：1トレ1住 時期：縄文時代中期 器種：土製円盤 法量：長さ 35 mm, 幅 34 mm, 厚さ 10 mm, 重さ 15.30 g 備考：土器片転用, 単節斜縄文 (RL), 胎土に金雲母含む, 内面磨き

第 56 図

1 出土位置・注記：1トレスK1 時代時期：縄文時代中期カ 器種：剥片 石材：堇青石ホルンフェルス (塊状, 結晶質, 堇青石, 白雲母, 黒雲母, 石英, 長石) 法量：長さ 41 mm, 幅 52 mm, 厚さ 10.5 mm, 重さ 11.63g

2 出土位置・注記：1トレスK1 時代時期：縄文時代中期カ 器種：剥片 石材：玉髓 (塊状, 白色半透明～不透明, 隠微晶質) 法量：長さ 25 mm, 幅 18 mm, 厚さ 6.0 mm, 重さ 2.09g

3 出土位置・注記：1トレスK1 時代時期：縄文時代中期カ 器種：剥片 石材：デイサイト (塊状, 微晶質, 斑晶〔長石カ〕), 石基は微晶質, 全体に細粒で明らかな斑状粗織を示さない) 法量：長さ 23 mm, 幅 11 mm, 厚さ 4.0 mm, 重さ 0.78g

4 出土位置・注記：1トレ 時代時期：縄文時代中期カ 器種：焼石 石材：アレナイト質細粒砂岩 (塊状, 帯緑淡褐灰色, 固結良い, 淘汰やや悪い, 円磨悪い, 砂粒〔石英, 長石, 黒雲母, 白雲母〕) 法量：長さ 158 mm, 幅 162 mm, 高さ 144 mm, 重さ 3.520 kg 備考：被熱による赤変あり

IV 海岸部の石棺墓の調査

－ 2020 年入道古墳群の調査報告－

1 遺跡の概要

(1) 地理的環境

入道古墳群は、茨城県の海岸線中央部、ひたちなか市磯崎町入道に所在する。

犬吠埼から北に長大な弧を描く鹿島灘の汀線は県中央を東流する那珂川によって途切れる。那珂川北部の台地は海に迫り、瘤状に突出した海岸台地を形成している。当古墳群は、その台地の東端部に位置しており、眼下に太平洋を見下ろす標高 10 m から 25 m 付近の台地平坦部から斜面部にかけて 10 基ほどの古墳や石棺が確認されている。発掘調査は 1974 年に実施されており、それ以前の 1960 年には道路建設中に石棺が確認されているが、調査の記録は残っていない（第 2 表）。

那珂川北部台地の当古墳群付近には、北に市域最大規模を誇る川子塚古墳や大穴塚古墳、磯崎東古墳群、磯合古墳群、南に三ツ塚第 1 古墳群、三ツ塚第 2 古墳群、三ツ塚第 3 古墳群、新道古墳群、三ツ穴横穴墓群など多数の墳墓が海岸部に連なるように所在しており、これらをまとめて「ひたちなか海浜古墳群」と称している。この中で、磯崎東古墳群や三ツ塚第 2 古墳群、入道古墳群では、海岸を望む斜面部に墳丘を有さない石棺墓を確認している。那珂川河口域のこうした密集する古墳や横穴墓、石棺墓の存在は、古墳時代の墓制の多様性やその変化をはじめ、海上交通に果たした当地域の重要性などを示すものとして注目されている [稲田 2021]。

(2) 基本土層

基本的には、表土から順にクロボク土層、ローム層、砂層の 3 層に大別される。

クロボク土層は、植物根等による攪拌された腐食土層と締まりのある黒褐色土層及びその下層の黒色土層に分かれる。下層の黒色土層は、台地の上部では土であるが、台地斜面の下部になるにつれ砂に変化していく。台地の基盤をなす砂層が徐々に崩落し植物等の繁茂により有機質を含んで黒色化したものと考えられる。

ローム層は、調査区南側の塚状に盛り上がった部分に

のみ存在し、今回の調査で確認した遺構部分には存在しない。

砂層は、粒子が粗くざらついた灰褐色や赤褐色のいわゆる山砂で締まりが強く縞状に厚く堆積し、台地全体の基盤層となっている。

2 調査について

(1) 調査の経緯

2020 年 7 月 16 日、常陸大宮土木事務所から主要地方道水戸那珂湊線の道路工事中に石室・石棺らしきものを発見した旨、県文化課に連絡があった。

7 月 17 日、県文化課、ひたちなか市教育委員会及び公社の 3 者が現地において、周知の埋蔵文化財包蔵地である「入道古墳群」の範囲内で古墳の石室 1 基及び石棺 3 基が出土したことを確認した。

7 月 22 日、県文化課及び市教育委員会により、事業地内の未掘削地の確認調査を実施した。その結果、事業地内の他地点においても遺構が所在する可能性が高いことが確認された。そのため、工事で発見された古墳の現状保存とともに、掘削工事範囲の縮小について常陸大宮土木事務所と協議し、計画の変更が了承された。



第 57 図 入道古墳群の位置

第 2 表 入道古墳群調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
0	1960	市(?)	立会	石棺 1	1
1	1974	市調査団	本調査	古墳 2、石棺 2	2
2	2020	県	立会	古墳 1、石棺 6 など	3

文献

1 那珂湊市政だより昭和 36 年 4 月 1 日号 2 入道古墳調査報告書 3 本書

8月26日付けで常陸大宮土木事務所から法94条通知が提出され、9月1日付けで茨城県教育委員会教育長から「工事立会」による記録保存の勧告がなされた。

(2) 検出した遺構

今回の調査で確認した遺構は、古墳1基（第2020-0号墳）、石棺墓6基（第2020-1～5・7号石棺墓）、石組遺構1基、集石2基（集石1・2）、溝状遺構1条、太平洋戦争に関連すると思われる大型土坑1基、遺構で

はないがその他に埋没谷1ヶ所がある。

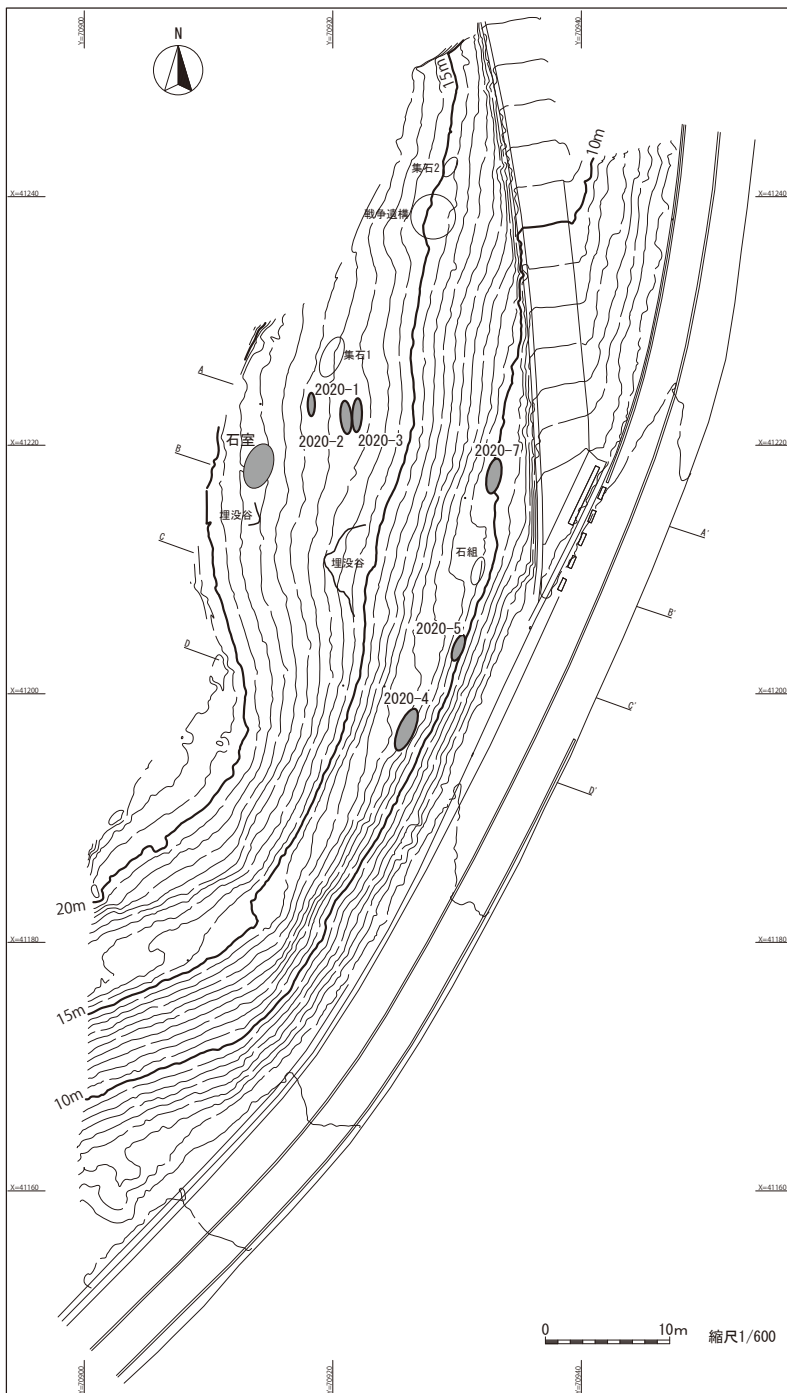
(3) 調査の経過

調査期間／2020年9月7日～11月30日

地形測量・遺構測量／(有)三井考測

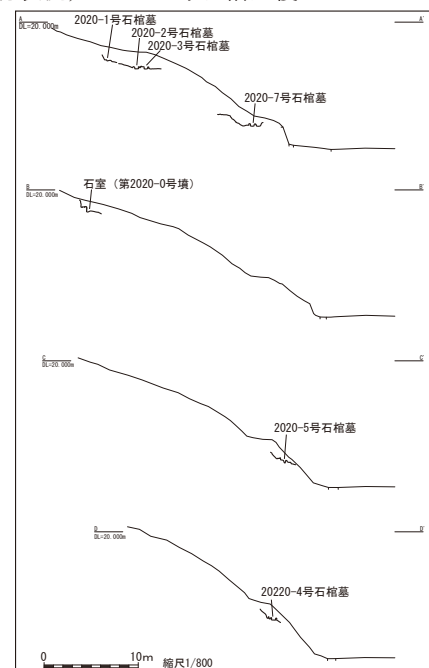
調査経過／9月7日：調査開始，2020-0号墳・2020-1～4号石棺墓の確認状況及び土層断面写真測量 9月9日：2020-2・3号石棺墓の蓋石撤去，人骨出土状況写真測量，人骨取り上げ作業，集石1掘り上げ，確認状況写真測量 9月11日：2020-2・3号石棺墓人骨取り上げ，取り上げ後平面写真測量 9月15日：2020-2・3号石棺墓石棺周辺の上部石材撤去，下部石材の掘り出し 9月16日：2020-1～3号石棺墓完掘平面写真測量，掘方東西セクション写真測量，掘方完掘後写真測量，集石1平面写真測量 9月17日：集石1石材撤去，TM-1北側溝確認作業，北側調査範囲の表土除去（大型土坑・集石2確認） 9月29日：大型土坑断面，集石2平面写真測量 9月30日：東側南斜面下部の表土除去（2020-4・5号石棺墓確認，2020-0号墳の南東部に埋没谷を確認） 10月1日～5日：2020-0号墳以北の法面掘削工事実施 10月6日：2020-0号墳遺存状況，谷部確認状況，2020-4号石棺墓覆土セクション，

真測量 9月11日：2020-2・3号石棺墓人骨取り上げ，取り上げ後平面写真測量 9月15日：2020-2・3号石棺墓石棺周辺の上部石材撤去，下部石材の掘り出し 9月16日：2020-1～3号石棺墓完掘平面写真測量，掘方東西セクション写真測量，掘方完掘後写真測量，集石1平面写真測量 9月17日：集石1石材撤去，TM-1北側溝確認作業，北側調査範囲の表土除去（大型土坑・集石2確認） 9月29日：大型土坑断面，集石2平面写真測量 9月30日：東側南斜面下部の表土除去（2020-4・5号石棺墓確認，2020-0号墳の南東部に埋没谷を確認） 10月1日～5日：2020-0号墳以北の法面掘削工事実施 10月6日：2020-0号墳遺存状況，谷部確認状況，2020-4号石棺墓覆土セクション，



※地形の等高線は調査前の状況

第58図 入道古墳群で検出した遺構の位置図



第59図 入道古墳群石棺墓の垂直位置

2020-5号石棺墓確認状況写真測量 10月7日～11月8日：2020-4号石棺墓のレベル付近まで掘削工事実施
 11月9日：東側北斜面下部の表土除去（2020-6・7号石棺墓確認） 11月10日：2020-4～7号石棺墓の覆土除去 11月11日：2020-4～7号石棺墓の確認状況写真測量，2020-4号石棺墓蓋石撤去・石棺内精査 11月13日：2020-5・7号石棺墓の蓋石撤去，2020-4・5・7号石棺墓の人骨出土状況写真測量，人骨取り上げ 11月16日：2020-4～7号石棺墓完掘作業，東側最北斜面下部表土除去（遺構なし） 11月24日：2020-4～7号石棺墓完掘作業 11月30日：2020-4～7号石棺墓完掘平面写真測量，調査終了

3 遺構と遺物

(1) 第2020-1号石棺墓

法面掘削工事区の北西コーナー部に石組とその南側に数点の石を確認した。石組の存在から石棺墓の可能性が高いため第2020-1号石棺墓として調査を実施した。

調査区北西部標高約15.0m（数値は石組下部，以下同様）に位置し，その東に近接して第2020-2・3号石棺墓が所在する。石組のレベルは，第2020-2・3号石棺墓より0.5mほど高い。

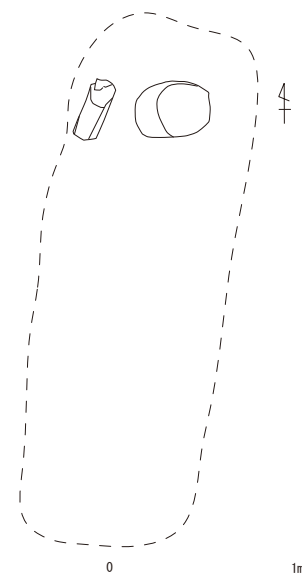
北東からの緩斜面の上部に構築されており，現地表から石組上面まで約1.2m。北側断面には古墳の周溝とみ

られる落ち込みと溝が観察され，本遺構が古墳より後代に構築されたとすると，周溝の窪地部分に構築された可能性が考えられる。

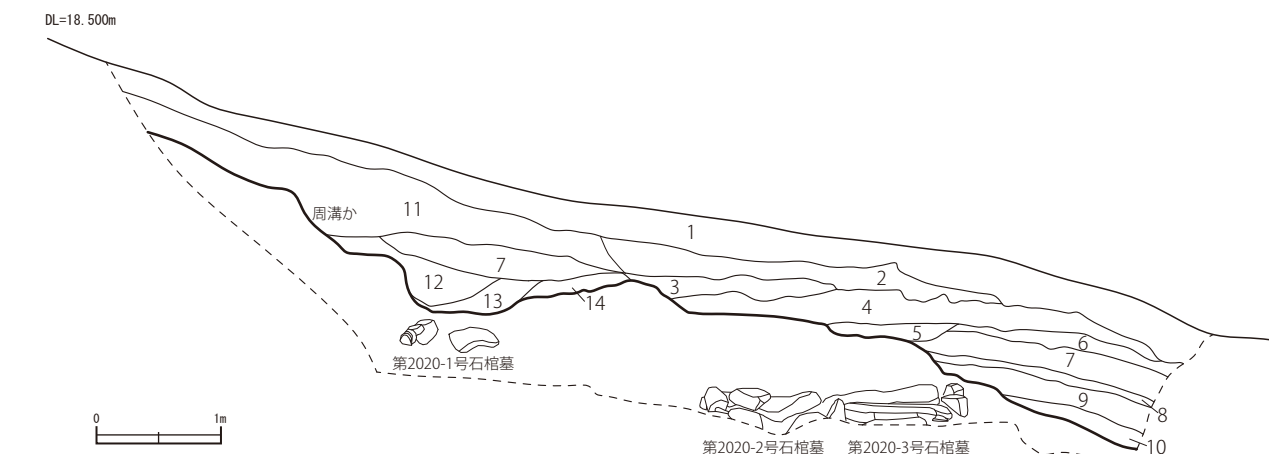
石組南側に確認された石の周囲を精査したところ多数の石が敷き詰められたように散乱していることが確認され，写真測量を行った。しかし，周囲の覆土の状況をさらに観察したところ攪乱されたものであることが判明した。これらの石の中には角材状のものが多く含まれていることから，第2020-1号石棺墓を破壊し，移動したものと判断した。以上のことから，第2020-1号石棺墓は北側の石組のみが残存した状況であることが明らかになった。

北側の石組は，当初壁面に端部が露出していただけであったため，調査区を拡張し，その全体を確認したところ2個の石材が間隔を開けて残存するのみで，それらの石材が石棺の一部なのかあるいは石棺外の何らかの石組の一部なのかは不明である。

石材を撤去し，掘方を確認したが西側と北側，北東側に基盤層の砂層を隅丸長



第61図 第2020-1号石棺墓平面図



土層説明

- | | | | |
|-------------------------|--|--|-------------------------------------|
| 1 表土 | 2・2020-3号石棺墓が構築され，その際の廃土が堆積しているのが4・5層か | 9 黒色土層（径1～2cm礫多量含む） | 遺構の埋土か） |
| 2 暗褐色土層（径1～3cm礫少量含む） | 6 暗褐色土層（径1～3cm礫多量含む） | 10 黄褐色砂層 | 14 黄色砂層（黒色土が混じる，第2020-1号石棺墓掘削時の廃土か） |
| 3 褐色土層（径1～2cm礫多量含む） | 7 黒色土層（径1～3cm礫多量含む 旧表土面に堆積した土層か） | 11 黒色土層（径1～3cm礫少量含む） | |
| 4 黄色砂層（径1～3cm礫多量含む） | | 12 黄褐色土層（径1～3cm礫多量含む） | |
| 5 黄色砂層（径1～3cm礫やや多量含む） | 8 黄色砂層（礫微量含む 下端は平坦面整地時の旧表土面か） | 13 黒色土層（径1cm礫少量含む） | |
| * 7層堆積後に7層を掘り込んで，第2020- | | * 12・13層は，第2020-1号石棺墓構築時の掘り込みまたはそこへの通路としての溝状 | |

第60図 第2020-1・2020-2・2020-3号石棺墓北側土層断面図（S=1/60）

方形に掘削している状況が確認された。また、西側掘方の一部にベンガラとみられる赤色部を確認した。

なお、遺物は確認されていない。

(2) 第 2020-2・3 号石棺墓

掘削工事区の北東コーナー部に南北を長軸として 2 基の石棺墓が東西に並んで確認された。西側を第 2020-2 号石棺墓、東側を第 2020-3 号石棺墓と呼称する。

立地の詳細は、掘削のため不明だが、北側が南西に登る緩斜面で、東側は段丘崖の急斜面から緩斜面に移る傾斜変換点の標高 15.5 m に位置し、段丘端部を掘り込んで構築されている。

第 2020-2 号石棺墓と第 2020-3 号石棺墓は、長辺を接するように構築されているが、第 2020-3 号石棺墓の方が第 2020-2 号石棺墓より少し北側に構築されており、南北辺は不並びである。ただし、第 2020-2 号石棺墓の石棺外北側には敷き詰められたような石組があり、その北側端部は第 2020-3 号石棺墓とほぼ並行する。

第 2020-2 号石棺墓と第 2020-3 号石棺墓の構築順は、第 2020-2 号石棺墓の掘方を第 2020-3 号石棺墓が切っていることが確認されたため、第 2020-2 号石棺墓が先に構築され、後に第 2020-3 号石棺墓が構築されたとみられる。

石棺の設置については、斜面部の基盤層を東西幅約 4 m、南北長は工事により南側が削平されていたため不明だが、石棺の規模から 3 m ほど水平に掘り込んだ区画に設置されたものとみられる。区画覆土の一部とみられる土層が北側断面で確認された。

① 第 2020-2 号石棺墓

石棺の規模は、南北長軸が 2.05 m、東西短軸が 0.7 m (内部規模は長軸 1.82 m、短軸 0.35 m、高さ 0.25 m) を測る。平面形は、やや胴張りの長方形で舟形状を呈す。側壁は東西とも 4 個の石材からなり、北壁は薄い石材 1 個、南壁は楔形をした 1 個の縦長の石材を深く埋め込んで構築している。石材の大部分は付近の海岸で採取される灰白色の硬質な砂岩が使用されているが、西側壁の北から 3 番目の石材は茶褐色の脆い砂岩が使用されている。蓋石は、確認時、3 枚が残されており、北端の 1 枚は原位置を保っていたが、その南 2 枚は石棺の長軸方向に並んで石棺内に落ち込むような形で確認されてお

り、工事の際に移動したものと考えられる。また、南端部の蓋石は失われていた。側壁の外側には側壁を補強するかのように石材が建て並べられており、北側の棺外には、多数の石材が敷き並べられたように確認された。また、石棺側壁材並びに蓋石材には灰白色の粘土で目張りが丹念に施されている。

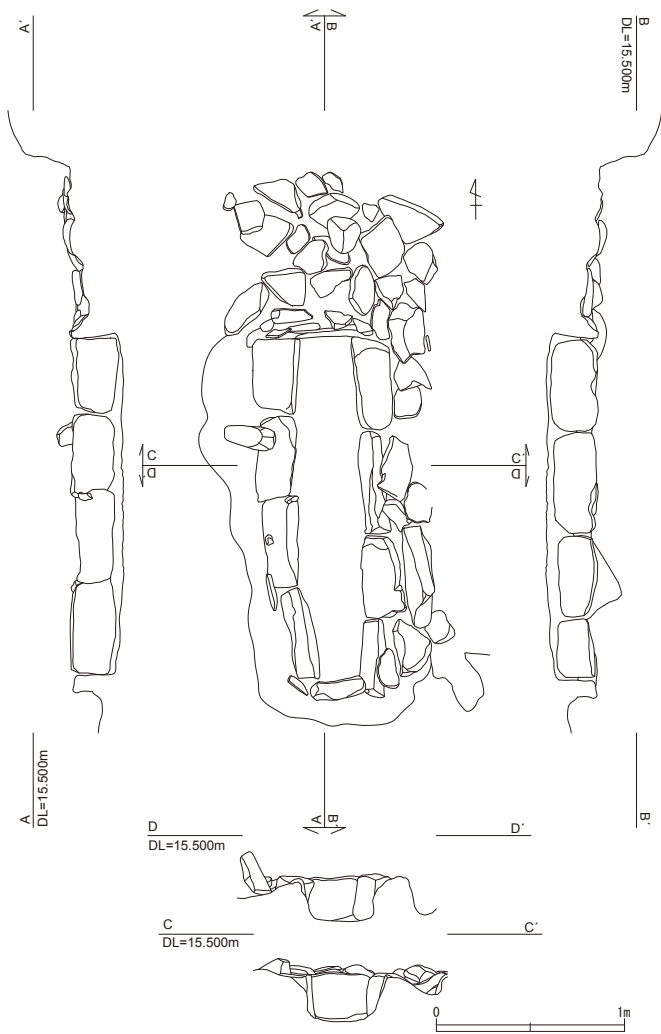
出土遺物はないが、人骨 1 体が出土した。小柄の壮年の女性ではないかと判断された。仰臥・伸展の姿勢で頭を北に向け、顔は上を向く状態で出土している。また、石棺内床面には周囲の砂とは明らかに異なる微細な粒子の円礫を含む細かい砂(海砂か)が数 cm 堆積しており、意識的に充填し、屍床としたものとみられる。

掘方は、北側石敷き部を含め南北 2.2 m、東西 0.9 m の隅丸長方形である。側壁上部からの深さは平均して 0.3 m 程度で、南端部には南壁の楔形の石材を埋め込んだ窪みがある。

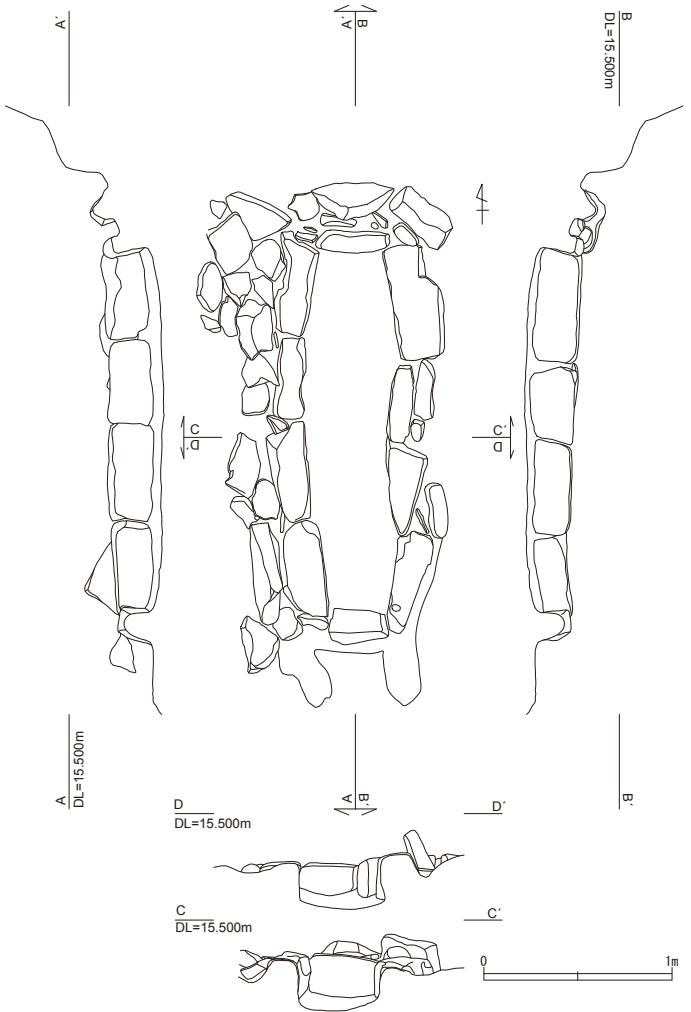
② 第 2020-3 号石棺墓

石棺の規模は、南北長軸が 2.1 m、東西短軸が 0.75 m (内部規模は長軸 1.88 m、短軸 0.5 m、高さ 0.27 m) を測る。平面形は、やや胴張りの長方形で第 2020-2 号石棺墓よりやや幅広である。側壁は、西側壁は 4 個の角材からなり、東側壁は西側壁と同様に 4 ブロックに分かれているが、北から 2 番目のブロックは 3 個の石で組まれている。南北壁は側壁よりも薄い石材各 1 個で構築されており、第 2020-2 号石棺墓と同様に南側は楔形をした 1 個の縦長の石材を深く埋め込んで構築している。蓋石は、4 枚で原位置を保っていた。石材は、第 2020-2 号石棺墓と同じ硬質な砂岩である。南東側を除く側壁の外側には側壁を補強するかのように石材が建て並べられている。第 2020-2 号石棺墓と接する部分についてはそれらを共有するような状態であり、各石材の帰属は判別できなかった。また、粘土の目張りは第 2020-2 号石棺墓と同様である。

出土遺物は、土師器片 2 点で、他に人骨 3 体がある。土師器片 2 点は石棺南端部で確認されたが、その内 1 点には明らかに石棺内の砂とは異なる黒色の砂がこびりついていること、南端部の蓋石材と南壁材との間に空隙があったことから石棺発見時に付近から出土したものを投げ入れた可能性が考えられ、本遺構に伴うものではないと判断した。なお、土師器片の 1 点は甑形土器の底部片



第 62 図 第 2020-2 号石棺墓実測図 (S=1/40)



第 63 図 第 2020-3 号石棺墓実測図 (S=1/40)



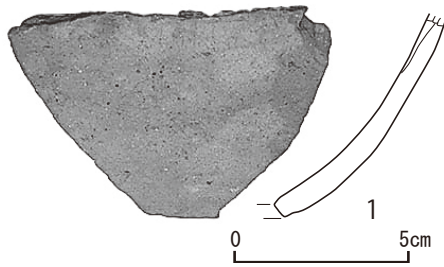
第 64 図 第 2020-2 (左)・2020-3 (右) 号石棺墓蓋石状況図 (S = 1/40)



第 65 図 第 2020-2 (左)・2020-3 (右) 号石棺墓人骨出土状況図 (S=1/40)

の破片で、詳細は以下のとおりである。

1 台帳:P1 材質:土師器 器種:甗 残存:底部片 法量:- 焼成:良好 色調:外面にぶい黄橙色,内面にぶい黄褐色 胎土:砂(白多,透多) 技法等:外面ヘラ削り,内面ヘラナデ。



第 66 図 第 2020-2 号石棺墓周辺出土土器実測図

人骨は、成人骨 2 体が仰臥・伸展の姿勢で顔が東（海）側を向き、東西に並んだ状態で、幼児骨は成人骨の足下（石棺南端部）で確認されたが遺存状態が悪く姿勢は不明である。成人骨は、石棺内東側が壮年半ばの男性（個体 1）、西側が壮年初めの女性（個体 2）と判断された。どちらも顔を北に向けている。埋葬順は、骨格の重なり状況から個体 1 の男性の埋葬後に個体 2 の女性が追葬されたとみられる。個体 3 の幼児（2 歳前後）は個体 2 の足下付近にまとまって出土し、やや散乱した状態であることから、個体 1 と同時かそれから時間を経た時期と思われる、個体 2 の最終埋葬時とは考え難い。個体 1 の一部や人骨周辺の土が赤色化しており、遺体上にベンガラを撒くような儀礼が行われた可能性がある。また、石棺内床面には第 2020-2 号石棺墓と同様に海砂とみられる砂の層が確認された。

掘方は、南北軸 2.45 m、東西軸 1.0 m の隅丸長方形で、深さは平均 0.3 m 程度である。

（3）第 2020-4 号石棺墓

調査区南東斜面部の中腹で確認され、第 2020-4 号石棺墓と呼称する。第 2020-3 号石棺墓の下に約 4 m、南に約 26 m の場所で、今回調査した遺構の中で最南に位置する。

立地は、東側の段丘崖の斜度 45° ほどの斜面の中腹で、標高約 11 m。急崖を掘り込んで構築されている。

石棺墓の規模は、南北長軸が 2.5 m、東西短軸が 0.7 m（内部規模は長軸 2.15 m、短軸 0.4 m、高さ 0.2 m）で、平面形は、やや胴張りの長方形を呈す。東西側壁は東壁が 4 個の石材からなり、西壁は 6 個、南北壁は各 1 個の石材で構築されている。石材の内、北東隅の側壁に使用された石材は長さが他の 2 倍以上あり、特徴的である。蓋石は 8 枚からなり、第 2020-2・2020-3 号石棺墓と比べると小ぶりである。また、南から 3 番目のものは他

が硬質な砂岩が使用されている中で、軟質の砂岩で粘土と同化し、棺内に落ち込んでいた。蓋石の確認状況を俯瞰すると南北に「く」（北側から見て）の字状にやや屈曲しており、南側を付け足したようにも見える。壁材並びに蓋石材には灰白色の粘土で目張りが施されている。

出土遺物はなく、人骨は 2 体出土した。北側のもの（個体 1）は頭を北に、南側のもの（個体 2）は頭を南にして確認された。両者とも仰臥・伸展の姿勢とみられるが、北側のものは、顔が上を向いているが、南側のものについては、蓋石が落ち込んでいたため遺存状態が悪く、不明である。個体 1 は壮年の男性、個体 2 は青年の男性と判断された。埋葬順については、南側のもの的大腿骨が、北側のものの上から出土したため、北側が先で、南側が後に追葬されたとみられる。頭を南にして追葬された例は今回の調査では第 2020-3 号石棺墓の埋葬姿勢が不明な幼児骨を除くと本例のみであり、特異である。埋葬順を考慮すると、蓋石の配置が南に付け足したように屈曲しているのは、追葬時に造り替えられた可能性も考えられる。人骨の下の床面には第 2020-2・2020-3 号石棺墓で確認されたものと同様の海砂と思われる細砂が堆積しており、その砂中には貝殻片とみられる白い粒子が多量に含まれていた。

石棺墓は、斜面部の基盤層を水平に南北長 3 m、東西幅 1.4 m（確認された基盤層部の幅であり、構築時はさらに表土層の厚み分 0.2～0.3 m ほど広がったと考えられる）ほどを、斜面を東西方向の断面で見ると L 字状に掘り込んだ区画に石材を据え置いたように設置されたとみられ、石棺部の明確な掘方は確認できなかった。

なお、石棺の覆土断面の観察によると、区画の西壁と石棺側壁の間に区画の壁から崩落した砂が石棺側壁側に三角堆積し、さらにそれが石棺上にまで達している状況が確認された。このことから石棺は埋め戻されることなく露出していたものと考えられる。石棺が埋め戻されていなかったことは、出土した人骨からも推定できる。個体 1 の右大腿骨にはネズミに齧られた痕が見られる（写真 1）。これは、石棺内に空間があり、ネズミが石棺外から出入り可能であったことを示している。

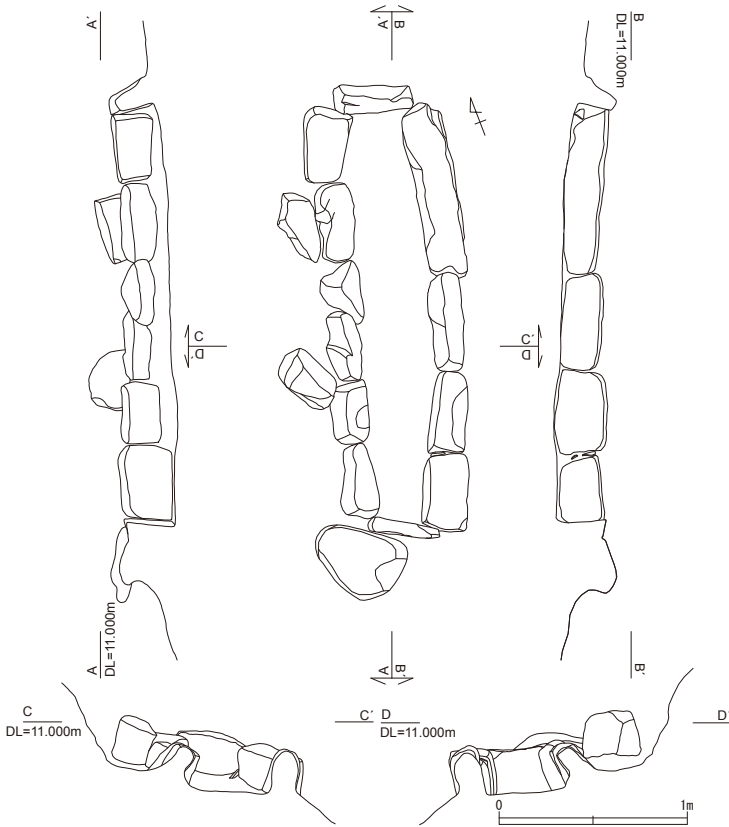
（4）第 2020-5 号石棺墓

調査区東斜面の下部で確認され、第 2020-5 号石棺墓

と呼称する。第 2020-4 号石棺墓の北 8 m、石組遺構の南 8 m に位置する。

立地は、東側の段丘崖の急斜面の下部で、標高約 9 m。急崖を掘り込んで構築されており、南壁及び東側壁が崩落した状態で確認された。

石棺墓の規模は、南側が崩落しているため南北長軸は



第 67 図 第 2020-4 号石棺墓実測図 (S=1/40)



第 68 図 第 2020-4 号石棺墓蓋石状況図 (S=1/40)

推定で約 2.1 m、東西短軸が 0.85 m（内部規模は長軸が推定で約 1.9 m、短軸 0.45 m、高さ 0.27 m）ほどで、平面形は、やや胴張りの長方形を呈す。西側壁は 4 個、東側壁は崩落のため 2 個を残す。東南側の崩落した 2 個は大きさから側壁であった可能性がある。北壁は 1 個、南壁は崩落のため不明である。西側壁の外側には小ぶりの石材が側壁を補強するように建て並べており、南端には、他の硬質な砂岩とは異なる茶褐色の軟質砂岩が 1 個据えられている。東側は崩落しており原位置を保っていないが、西側と同大な石材が落ち込んで確認されていることから西側と同様な状況であったことが推察される。残存する蓋石は 4 枚で、東側壁が崩落した影響によりずれており、南側の一部が失われている。壁材並びに蓋石材には灰白色の粘土で目張りが施されているが、崩落により、棺内全体に砂が堆積している。

出土遺物は鹿角装刀子 1 点と鉄鏃 1 点で、その他に人骨 1 体が出土した。人骨は青年の女性で、頭部を北に埋葬されていた。石棺が崩れている状況であったため、遺存状態が悪く、出土状況の詳細は不明である。

遺物は人骨の胸の周辺から出土した。石棺が崩れているため、正確な出土位置はわからない。遺物の詳細は次のとおりである。

- 1 台帳：S1 材質：鉄・鹿角 種類：鹿角装刀子 法量：長 18.1, 刃部長 8.5, 刃部幅 2.0, 刃部厚 0.4, 茎部幅 1.3, 柄部長 9.7, 柄部幅 2.0, 柄部厚 1.7 備考：刃部片側に目の粗い平織りの布がみられる。
- 2 台帳：S2 材質：鉄

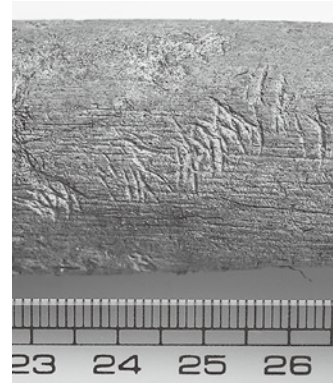
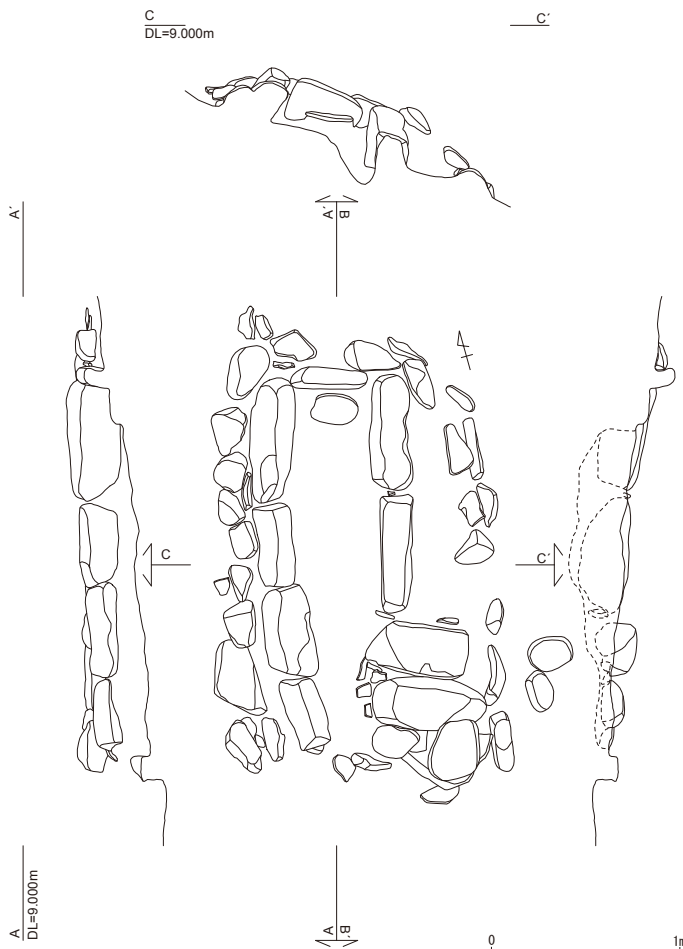


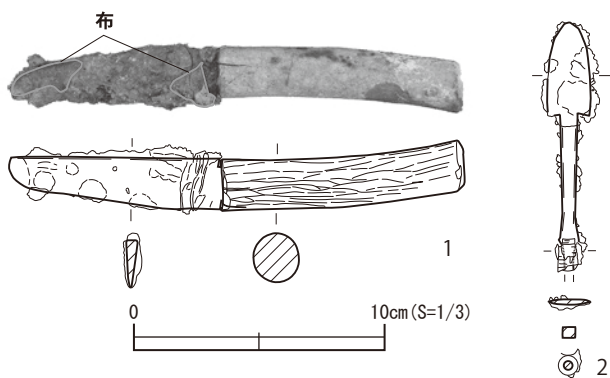
写真 1 ネズミの齧り痕



第 69 図 第 2020-4 号石棺墓人骨出土状況図 (S=1/40)



第70図 第2020-5号石棺墓実測図 (S=1/40)



第72図 第2020-5号石棺墓出土遺物



写真2 刀子に残る布



第71図 第2020-5号石棺墓蓋石状況図 (S=1/40)

種類：鉄鍬 法量：長(9.8)、鍬身部最大幅1.5、頸部幅0.5、茎部径0.3 備考：茎部には別の鉄鍬の木の皮巻きの一部がみられるため、もう1点の存在が推定できる。

人骨の下の床面には他の石棺墓と同様に海砂と思われる細砂が堆積している。

石棺墓は、第2020-4号石棺墓と同様に、斜面部を水平にL字状に掘り込んだ区画に設置されているが、構築面が基盤層と黒色土層の境目であったために黒色土層の部分が崩落したと考えられる。区画の規模は、南北長3m、東西幅2m程度。石棺部の明確な掘方は確認できなかった。

(5) 第2020-7号石棺墓

調査区東部の斜面下部の黒色表土を除去中に石棺の北壁材を確認し、第2020-7号石棺墓と呼称する。第2020-5号石棺墓の北7m、第2020-2・2020-3号石棺墓の東6mに位置する。

立地は、東側の段丘崖の斜面の下部で、標高約9mに位置する。斜面の黒色土を掘り込んで構築されている。

石棺の規模は、南北長軸が2.0m、東西短軸が0.7m(内部規模は長軸1.85m、短軸0.35m、高さ0.22m)で、平面形は、長方形を呈す。東側壁は3個、西側壁は5個、北壁は遺構確認時にずれ落ちたが、南北壁は各1個で構築されている。東西側壁の各石材間と南北壁と側壁の石

材間の外側には小ぶりの石材が隙間を充填するように建て並べている。蓋石は5枚で、真ん中の1枚は間隙を塞ぐように細長いものを使用されている。壁材並びに蓋石材には灰白色の粘土で目張りが施されており、棺内は埋まりきらず空洞部が残されていた。

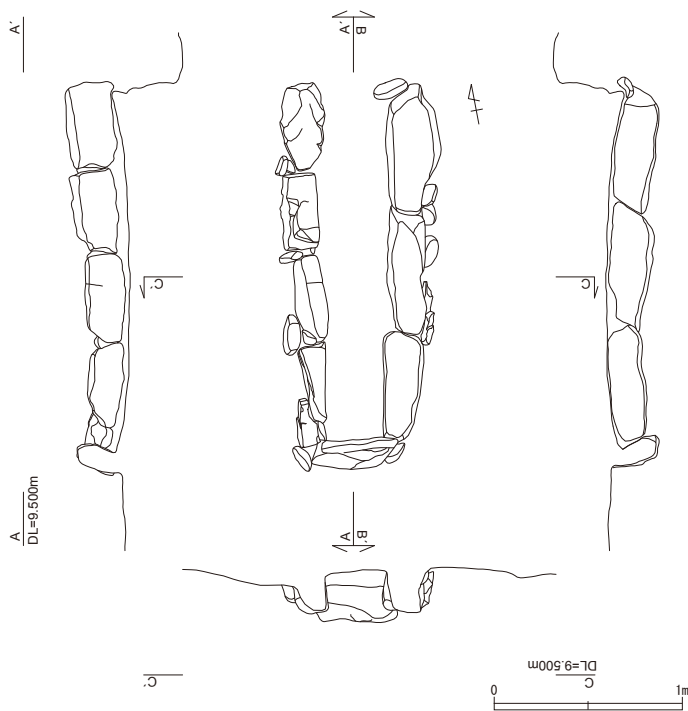
出土遺物はないが、人骨が1体あり、仰臥・伸展の姿勢で頭部を北に顔は上を向いて埋葬されている。人骨は壮年の女性と判断された。

人骨下の床面には他の石棺と同様に細砂が堆積している。

石棺北側の土層断面を観察すると、基盤砂層が崩落して再堆積した暗褐色や黒色の砂礫層中に構築されている。石棺の覆土上部には、区画の覆土とみられる層とその上に道の跡と思われる固く硬化した砂礫層が確認されている。石棺は、第2020-4・2020-5号石棺墓と同様に、斜面部を水平にL字状に掘り込んだ区画に設置されていたと考えられるが、区画全体が黒色砂中に構築されており、その正確な形状を確認することはできない。土層や石棺の規模から区画の規模は、南北長2.8m、東西幅1.3m程度とみられる。石棺部の掘方は確認できなかった。

(6) 第2020-0号墳(古墳)

道路拡幅のための法面掘削工事中に発見され、石室の羨道部と思われる一部が破壊された状況で確認した。残



第73図 第2020-7号石棺墓実測図 (S=1/40)

存している羨道部と思われる部分の北側には玄門らしきものがあり、玄室はその奥に埋没している状況をボーリング調査で確認した。

石室は調査区北部の西側法面頂部標高約19mに位置し、その立地は東側及び南東側が大きく掘削されていたため詳細は不明だが、北東側からの緩斜面を登り切った平坦面に構築されたと考えられる。

工事法面の断面観察によると、石室の南側3mの基盤砂層中に周溝状の黒色土の落ち込みがあるが堆積土の状況から後述する埋没谷の谷頭部とみられ、周溝は確認されなかった。また、北側の周溝についても第2020-1号石棺墓上部の北側東西断面にみられる落ち込みが周溝の可能性はあるが判然としない。周溝であれば円墳と仮定して径10m程度の規模が想定される。墳丘は、盛土部が後代に削平されたことも考えられるが、石室付近や周溝内と考えられる範囲の断面においても明確な盛土は全く観察されず、地表面の地膨れも確認できなかった。周溝もなく低墳丘の古墳は、同じ地域の三ツ塚第2古墳群や磯崎東古墳群でも確認していることを参考にすると、石室を覆い隠す程度の低い墳丘からなる古墳である可能性が考えられる。羨道部は、大小はあるが30cm×20cm×15cm程度の直方体の石材を3段から5段積んで構築されている。石材の一部には加工した痕跡を確認した。羨道部の規模は南北約2m、東西約1.4m(掘削のため



第75図 第2020-7号石棺墓人骨出土状況図 (S=1/40)

第74図 第2020-7号石棺墓蓋石状況図 (S=1/40)

残存値)で、床面は平坦で黒色土をたたきしめたように硬化している。羨道部であれば、通常、出入口として開口すべき南側も西(山側)壁と同様に石が積まれていた。よって上部から出入する構造のものと考えられることから、羨道部よりも前室の可能性が高い。このことは、前述した墳丘形状の推定とよく符合するものと考えられる。

本古墳については、工事計画を変更し、現状保存することとし、確認状況を写真測量し、調査を終了した。

(7) その他の遺構

①石組遺構

調査区東斜面の下部で確認され、当初、石棺と考えられたため第2020-6号石棺墓と呼称したが、下記のとおり石棺墓と認定することはできず、石組遺構とした。よって、第2020-6号石棺墓は欠番となっている。第2020-5号石棺墓の北4m、第2020-7号石棺墓の南4mに位置する。

立地は、東側の段丘崖の急斜面の下部で、標高約10m。斜面の黒色土中に階段状に二段に分かれた状態で石組が確認された。

当初、下段の石組が直線的に組まれ石棺の側壁のように観察されたため、西側側壁を残して石棺が壊され、組み直されたものと推定した。しかし、側壁とみられた石組を精査したところ、石棺に共通した目張りの粘土がないこと、石材は他と同様な硬質砂岩であるが全体的にかなり小さいこと、裏込めの石材が他の石棺では立てたように組まれているのに対して、横に積んだように組まれていること、などから石棺の側壁とは断定できなかった。

上段の石組については、石材は軟質の凝灰岩と思われる1点を除き硬質砂岩であるが、側壁とみられた石組のものよりかなり大きく、いわゆる小口積みのように長辺を斜面に対して直交して組まれた部分があり、土留めの役割を果たしていたものと考えられる。また、石組遺構が確認された位置付近には斜面を北から南方向に登る道があったことがわかっており、上段の石組周囲からその道に伴うとみられる硬化面が確認された。

以上のことから、石組遺構は、元々は石棺であった可能性は捨てきれないが、道に伴う土留めなどの何らかの施設と考えたい。

②集石

・集石1

調査区北部、第2020-2・2020-3号石棺墓の北2m付近で確認され、集石1と呼称する。

立地は、標高17m付近の傾斜がやや緩やかな斜面の中腹に位置する。斜面の黒色土中に東西南北ともに3m程度の範囲に、不規則に集められたような状態で確認された。

石の大きさは、10cmから50cmほどと大小様々であるが、比較的大きなものが多い。石質は硬質砂岩である。



第76図 第2020-0号墳石室羨道部(前室)平面図(S=1/40)



第77図 石組遺構平面図(S=1/40)

斜面部に不規則に置かれたような状態であり、意図的に組んだような箇所は確認できなかった。

また、基盤の砂層との間には黒色土の間層があり、集石の下部に第2020-1号石棺墓の上部に続く溝が確認されたことから、その溝よりも後代に構築されたものとみられる。

性格は不明であるが、あるいは、石棺墓の構築材として使用する石材の集積場所であったのかもしれない。

・集石2

調査区北部、集石1の北9mで確認され、集石2と呼称する。

立地は、北東緩斜面の中腹で、標高約15m。西側は調査区外に延びており全体の規模は不明である。確認できた規模は、南北1.1m、東西0.9mで、斜面の黒色土の比較的上層中に不規則に集められたような状態で確認された。

石の大きさは、10cmから50cmほどで集石1とほぼ同様である。石質は硬質砂岩である。石棺に使用される粘土や意図的に組んだような箇所は確認できなかったことから、その性格は不明である。

③溝状遺構

調査区北部、第2020-1号石棺墓の北側に所在し、第2020-0号墳の周溝と重複して構築されており、集石1の下部を南北方向に走る。

第2020-1号石棺墓の北側上部土層断面（第60図）で第2020-0号墳の周溝とみられる落ち込みの底面部にさらに落ち込んだ形で断面が観察された。第2020-0号



第78図 集石1（左）・2（右）平面図（S=1/60）

墳との切り合い関係は、必ずしも明確ではない。

断面の規模・形状は、第2020-0号墳周溝底面と考えられる基盤砂層を上幅1.2m、下幅0.8mほど掘り込んだ逆台形状で、集石1の下から確認できた長さは1.0mほどである。さらに北側に延びていたものとみられるが黒色土中の掘り込みとなっているため確認することはできなかった。

溝の性格は、第2020-1号石棺墓の区画に続いていたとみられることから、通路のような役割をもっていた可能性が考えられる。

④大型土坑

調査区北部、集石1の北東7m、集石2の南2mに位置する。立地は北東緩斜面の中腹に所在し、地表面はわずかな平坦面となっていた。

平面形は隅丸の方形で、南北長3.0m、東西確認長1.5m、深さ2.0mの大型の土坑である。

覆土は、自然堆積で、壁の崩落層が観察され、開口していたものが徐々に埋まっていった状況がわかる。覆土中から、腐食した松材や電線と思われるケーブルが出土した。

立地や規模、出土したケーブルから太平洋戦争中の海上警戒等のための何らかの施設跡と考えられる。

⑤埋没谷

調査区の中央部、第2020-0号墳のやや南寄りの東側斜面部に黒色土で覆われた埋没谷の存在を確認した。谷の規模は標高15.5m地点で南北幅7mほどである。第2020-0号墳の南側にその谷頭部が続いており、第2020-0号墳はこの谷部を上り詰めた地点を選んで構築された可能性もある。

（8）石棺墓について

・石棺墓が新たに6基確認され、過去に確認された3基と合わせて入道古墳群内で9基の存在が確認されたことになる。

・石棺墓（特に斜面下部のもの）は、斜面部を東西方向の断面で見るとL字状に掘削して平坦面を造り、そこに石棺墓を構築したことが明らかとなった。

- ・第 2020-4 号石棺墓の蓋石上部の覆土の堆積状況から、石棺は、埋め戻されることなく蓋石が露出していた可能性が高いことが確かめられた。
- ・石棺の底面には例外なく海砂と思われる砂が敷き詰められていることが確認された。
- ・従前、付近で調査された他の石棺墓でも確認されていたが、石棺には単体で埋葬されたものと複数人が埋葬されたものがあることが確認された。
- ・複数人が埋葬された石棺には、成人だけでなく、幼児も埋葬されており、家族墓のような可能性が考えられる。
- ・すべての石棺が南北を長軸としていた。地形の制約によるものと解釈することもできるが、古墳の石室の向きとも合致することから他の要因も考慮されるべきかもしれない。石棺墓は東向き斜面部だけに存在するのかが問題になる。
- ・頭を南向きに追葬された第 2020-4 号石棺墓の成人と埋葬姿勢が不明な第 2020-3 号石棺墓の幼児の例を除き、ほとんどの遺体が頭を北にして埋葬されていたことは、石棺底面の海砂の撒布を含めて、他の石棺墓も同様なあり方である。埋葬方法の習俗や慣習に強い規制が働いている表れとみられる。また、第 2020-4 号石棺墓のような特殊な例についてのあり方も今後の課題となる。
- ・標高約 19m の台地縁辺の平坦部に古墳（第 2020-0 号墳）が構築され、石棺墓は標高 15m 付近の斜面部中位（第 2020-1・2・3 号石棺墓）と標高 9 m 付近の斜面部下位（第 2020-4・5・7 号石棺墓）に構築されたものに 2 分される。また、中位に構築されたものの方が下位に構築されたものに比べて、蓋石が大きく、丁寧な造りで、埋葬にベンガラを使用するなどの違いがある。構築年代の差であることも考えられるが、被葬者の何らかの社会的な身分（地位）等の差である可能性が大きい。
- ・石棺墓間には第 2020-1 号石棺墓で確認されたような

道があった可能性がある。また、第 2020-4・5・7 号石棺墓を結ぶように斜面を登る道が存在していた。今回の調査で裏付けることはできなかったが、この道は、石棺墓間をつなぐ道の痕跡であった可能性がある。

・第 2020-1・2・3 号石棺墓のように地形測量図の等高線の開いた緩斜面部や、第 2020-4・5・7 号石棺墓のように斜面の道沿いに石棺墓が確認されたことは、今後、斜面部の石棺墓の分布を推定する上で参考になるとみられる。

・今回の調査で確認した人骨は、8 体である。人骨の調査は国立科学博物館の坂上和弘氏と梶ヶ山眞里氏に依頼し、その結果は第 3 表のとおりである。詳細についてはすでに [坂上・梶ヶ山 2022] と [梶ヶ山 2023] に報告されている。推定平均身長は男性で 158 cm、女性で 150 cm と算定される。第 2020-2 号石棺墓、第 2020-5 号石棺墓、第 2020-7 号石棺墓は女性の単体埋葬であり、今回の調査では男性の単体埋葬がない。出土遺物はほとんど伴わない代わりに、人骨の残存状況は非常に良好であるため、本調査の出土人骨が今後の古墳時代研究の貴重な資料になることが期待される。

* 今回の報告は、茨城県文化課池田晃一氏（当時）が調査終了時に報告した「ひたちなか市入道古墳群発掘調査記録」（2021 年 6 月 23 日）をもとに作成した。また、測量調査は有限会社三井考測（三井猛氏、梅田由子氏）が実施し、その成果品を使用している。

参考文献

稲田健一 2021 「ひたちなか海浜古墳群・虎塚古墳・十五郎穴横穴墓群」『第 4 回埋蔵文化財シンポジウム発表資料集 茨城県の古墳～最新の調査成果からみた茨城県の古墳～』大洗町教育委員会, pp37-44

梶ヶ山眞里 2023 「ひたちなか海浜古墳群出土の人骨（1）」『ひたちなか埋文だより』第 59 号 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター, pp14-17

坂上和弘・梶ヶ山眞里 2022 Human skeletal remains of the Kofun period excavated from the Hitachinaka seaside tumulus cluster, Ibaraki Prefecture (Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. D, 48, pp. 11-28)

第 3 表 入道古墳群 2020 年出土人骨一覧表

遺構名 / 個体名	個体数	残存状態	性別	年齢	残存部位			埋葬状態	備考	推定身長 (cm)	
					頭	四肢骨	その他				
第 2020-2 号石棺墓	1	A	女性?	壮年	◎	◎	○	頭位北 伸展葬	頭蓋骨は男性的、大坐骨切痕湾入鈍角(女性)	148.0	
第 2020-3 号石棺墓	3	①	A	男性	壮年(後半)	○	◎	○	頭位北 概ね伸展葬		158.3
		②	A	女性	壮年	◎	◎	○	頭位北 伸展葬	大腿骨骨体上部超扁平	154.7
		③	B	不明	幼児	○	○	○	集骨?	2才前後	
第 2020-4 号石棺墓	2	①	A	男性	壮年	◎	◎	○	頭位北 伸展葬	ダウン症?	157.9
		②	B	男性	青年	○	○	○	頭位南(対位) 伸展葬		
第 2020-5 号石棺墓	1	A	女性	青年	◎	○	○	頭位北 伸展葬	副葬品あり(鹿角装刀子 1 点と鉄鏃 1 点)		
第 2020-7 号石棺墓	1	B	女性	壮年	○	○	○	頭位北 伸展葬			



1 市毛遺跡第10次調査区



2 市毛下坪遺跡第23次調査区



3 市毛下坪遺跡第24次調査区



4 市毛下坪遺跡第25次調査区



5 大房地遺跡第21次調査区



6 大和田遺跡第6次調査区



7 三反田蛭塚遺跡第8次調査区



8 金上向山遺跡第4次調査区



9 三反田古墳群第7次調査区



10 高野富士山遺跡第20次調査区



11 高野富士山遺跡第21次調査区



12 東中根清水遺跡第7次調査区



13 田彦古墳群第2次調査区

図版 2 試掘調査 (2)



14 市ノ山遺跡第1次調査区



19 ニツ森古墳群第3次調査区



15 柳沢十二所遺跡第2次調査区



20 柴田遺跡第10次調査区



16 北根A遺跡第1次調査区



21 下高井遺跡第8次調査区



17 平磯宮上遺跡第2次調査区



22 蜷塚西貝塚第2次調査区



18 ニツ森古墳群第2次調査区



23 原の寺遺跡第2次調査区



24 地蔵根遺跡第9次調査区



29 勝倉若宮遺跡第7次調査区



25 筑波台遺跡第5次調査区



30 塙坪遺跡第1次調査区



26 金上古墳群第1次・金上塙遺跡第12次調査区



27 磯合古墳群第9次調査区



28 磯合古墳群第10次調査区

図版4 入道古墳群(1)



古墳(石室)と第2020-1・2・3号石棺墓検出の状況(東から)



第2020-0号墳羨道部(前室)の石組の状況(東から)



第2020-2号石棺墓(左)・3号石棺墓(右) 蓋石の状況(南西から)



第2020-2号石棺墓(左)・3号石棺墓(右) 完掘状況(南西から)



第2020-2号石棺墓(左)・3号石棺墓(右) 人骨出土状況(南東から)



第2020-4号石棺墓蓋石の状況(東から)



第2020-4号石棺墓完掘状況(北から)

図版 6 入道古墳群 (3)



第 2020-5 号石棺墓蓋石の状況 (北から)



第 2020-5 号石棺墓完掘状況 (北から)



第 2020-7 号石棺墓蓋石の状況 (東から)



第 2020-7 号石棺墓完掘状況 (北から)



第 2020-7 号石棺墓人骨出土状況 (東から)

報告書抄録

フリガナ	レイワゴネンドヒタチナカシナイイセキハックツチョウサホウコクシヨ
書名	令和5年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
編集者名	佐々木義則
著者名	稲田健一, 田中美零, 佐々木義則
編集機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化課文化財調査事務所
編集機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根 3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行機関	ひたちなか市教育委員会
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市東石川 2 丁目 10 番 1 号
発行年	2024 年 3 月 24 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	面積	備考
		市町村	遺跡番号						
イチゲ 市毛	ひたちなか市 市毛	08221	005	36° 23' 41"	140° 30' 11"	24.2m	202301	137 m ²	10 次調査
イチゲシモツボ 市毛下坪	ひたちなか市 市毛	08221	130	36° 23' 31"	140° 30' 21"	26.4m	202302	114 m ²	23 次調査
				36° 23' 30"	140° 30' 20"	26.5m	202302	115 m ²	24 次調査
				36° 23' 33"	140° 30' 23"	26.2m	202311 ~ 202312	352 m ²	25 次調査
オオボウチ 大房地	ひたちなか市 勝倉	08221	054	36° 22' 34"	140° 32' 7"	22.6m	202302 ~ 202303	56 m ²	21 次調査
オオワダ 大和田	ひたちなか市 中根	08221	077	36° 22' 35"	140° 33' 48"	21.0m	202303	136 m ²	6 次調査
ミタンダシイヅカ 三反田規塚	ひたちなか市 三反田	08221	284	36° 22' 3"	140° 33' 22"	20.4m	202303	23 m ²	8 次調査
カネアゲムカイヤマ 金上向山	ひたちなか市 金上	08221	116	36° 22' 17"	140° 32' 27"	22.4m	202304, 202307~202308	614 m ²	4 次調査
ミタンダコフンゲン 三反田古墳群	ひたちなか市 三反田	08221	018	36° 21' 52"	140° 33' 35"	19.4m	202305	50 m ²	7 次調査
コウヤフジヤマ 高野富士山	ひたちなか市 高野	08221	062	36° 25' 45"	140° 33' 13"	31.7m	202305	32 m ²	20 次調査
				36° 25' 48"	140° 33' 14"	31.6m	202307	25 m ²	21 次調査
ヒガシナカネシミズ 東中根清水	ひたちなか市 中根	08221	010	36° 22' 41"	140° 33' 40"	21.7m	202305	34 m ²	7 次調査
タビコフンゲン 田彦古墳群	ひたちなか市 田彦	08221	026	36° 24' 55"	140° 31' 2"	28.1m	202306	282 m ²	2 次調査
イチノヤマ 市ノ山	ひたちなか市 長砂	08221	178	36° 25' 19"	140° 34' 45"	32.8m	202306	103 m ²	1 次調査
ヤナギサワジュウニシヨ 柳沢十二所	ひたちなか市 柳沢	08221	213	36° 21' 21"	140° 34' 26"	19.8m	202306	21 m ²	2 次調査
キタネエー 北根 A	ひたちなか市 足崎	08221	090	36° 25' 35"	140° 34' 11"	27.9m	202307	13 m ²	1 次調査
ヒライソミヤウエ 平磯宮上	ひたちなか市 平磯町	08221	308	36° 21' 38"	140° 36' 58"	19.6m	202307	43 m ²	2 次調査
フタモリコフンゲン 二ツ森古墳群	ひたちなか市 福田	08221	172	36° 26' 6"	140° 32' 22"	32.0m	202308	29 m ²	2 次調査
				36° 26' 6"	140° 32' 24"	32.1m	202308	20 m ²	3 次調査
シバタ 柴田	ひたちなか市 中根	08221	101	36° 23' 3"	140° 32' 52"	23.2m	202308	19 m ²	10 次調査
シモタカイ 下高井	ひたちなか市 三反田	08221	001	36° 21' 39"	140° 33' 49"	19.7m	202308	47 m ²	8 次調査
シイヅカニシカイヅカ 規塚西貝塚	ひたちなか市 三反田	08221	108	36° 22' 0"	140° 33' 19"	22.1m	202309	19 m ²	2 次調査
ハラノテラ 原の寺	ひたちなか市 足崎	08221	181	36° 25' 2"	140° 34' 17"	32.2m	202309	42 m ²	2 次調査
ジゾウネ 地蔵根	ひたちなか市 勝倉	08221	119	36° 22' 40"	140° 31' 52"	22.5m	202309	21 m ²	9 次調査
ツクバダイ 筑波台	ひたちなか市 市毛	08221	048	36° 23' 45"	140° 29' 56"	25.4m	202309	199 m ²	5 次調査
カネアゲハナワ 金上塚 カネアゲコフンゲン 金上古墳群	ひたちなか市 金上	08221	113 112	36° 22' 20"	140° 32' 4"	22.9m	202310 ~ 202311	316 m ²	12 次調査
									1 次調査
イソアイコフンゲン 磯合古墳群	ひたちなか市 磯崎町	08221	241	36° 22' 40"	140° 37' 22"	24.1m	202310	84 m ²	9 次調査
				36° 22' 39"	140° 37' 30"	23.8m	202312	38 m ²	10 次調査
カツクラワカミヤ 勝倉若宮	ひたちなか市 勝倉	08221	120	36° 22' 41"	140° 31' 58"	22.7m	202310 ~ 202311	154 m ²	7 次調査
ハナツボ 塚坪	ひたちなか市 西大島	08221	146	36° 24' 12"	140° 31' 22"	24.4m	202312	38 m ²	1 次調査

令和5年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

令和6(2024)年3月14日発行

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発行 ひたちなか市教育委員会

〒312-8501 茨城県ひたちなか市東石川2-10-1

TEL029-273-0111

公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499

TEL029-276-8311

印刷 大富印刷株式会社

〒311-1251 茨城県ひたちなか市山崎160(第二山崎工業団地)